第 4 巻

成寿

SEIJU

1986 春季号

横浜 善光寺刊

述（せんということ）　千

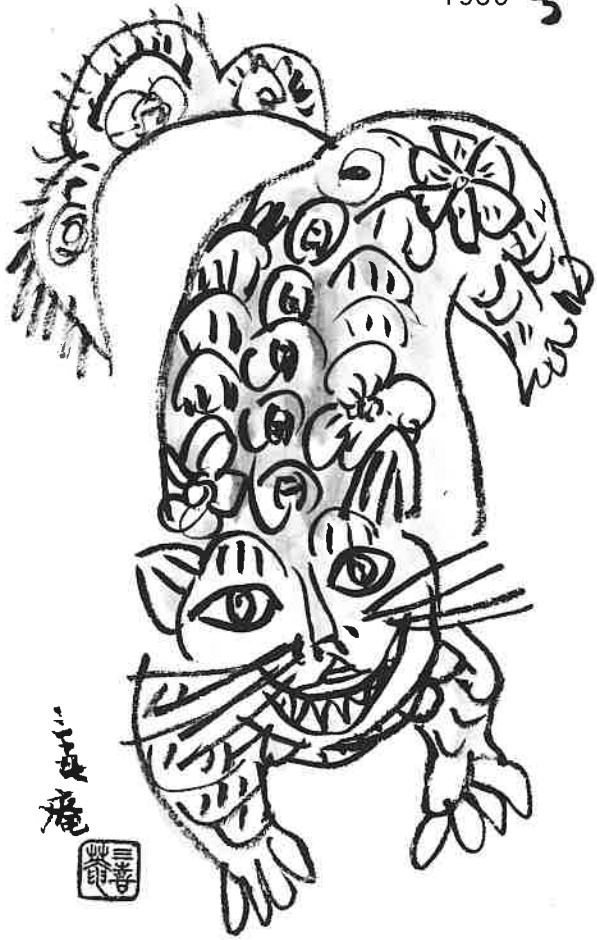
無益の句より成る
そのことば
たとえそのかず
千ありとも
それを聞き
心の寂（やすけき）をうる
意味深き一句こそ
遥かにもまさる

「法句経」

成寿

SEIJU

1986 春季号



文珠菩薩

仏様の徳やはたらきを表わすため、仏様の両脇にはべっている菩薩様を脇士（きょうじ）、または脇仏（わきぼとけ）といいます。お釈迦様の脇仏は文珠菩薩と普賢菩薩です。三人寄れば文珠の智慧で文珠菩薩は智慧を代表するお方です。

普賢菩薩

普賢菩薩は仏様の慈悲を象徴するお方です。仏様の徳は悲智円満といって、慈悲と智慧を円満に兼ね具えているのです。それを二人の菩薩様が夫々代表することによって、仏様の徳と力が一層発揮されるのです。

福田に種子を種える

山主　置田大周

昨年四月、黄檗宗の田中君、浄土宗の梅田君の両人を、留学僧としてタイ国に送り、十月、受入先のワット・パクナムに表敬訪問かたがた、両君の激励に行って参りました。おかげで二人は元気に精進しておりましたし、またワット・パクナムの住職は、二人は稀にみる模範的な留学僧だと賞賛しておられました。日本からの留学僧の評価を更に高める事ができまして、たいへん有難く思うと共に、第一回派遣だけに幸先のよいことと力強く感じた次第であります。

次に、十月に国安大智君をニューヨークの禅センターに送り、昨年アメリカへの留学僧派遣の下準備をととのえております。とにもかくにも、海外留学僧派遣が第一歩を踏み出し得たことは、檀信徒の皆様はじめ、御指導御荷担の諸老師のおかげと、厚く御礼申し上げます。

仏教に三福田の教えがあります。農家が春タネを蒔き、秋は収穫するように、三つの福田にタネを種えれば、必ず果報が得られるというのである。それは、敬田、恩田、悲田であります。

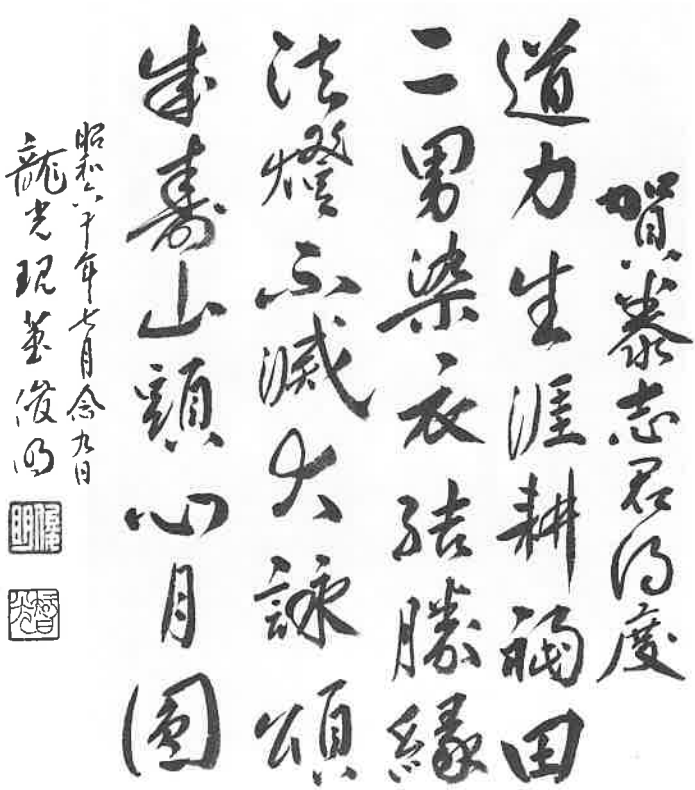
敬田とは、仏・法・僧の三宝を恭敬し供養すれば無量の福徳が授かるというのであり、恩田とは、父母祖先をはじめ、教え育ててくれた人に仕えて恩を報ずれば福を生ずるというのであり、悲田とは、困っている人に施しをすれば、幸福がもたらされるというのであります。

皆様方は、仏・法・僧の三宝に帰依し、優秀な青年僧に海外で勉学の機会を与える浄財を喜捨して敬田にタネを植え、父母祖先に供養のまことを捧げて恩田を耕し、そして当寺でおこなう各種の行持に参加して悲田にタネを蒔いておられますので、正に三福田に功徳を積んでおられます。私もまた、皆様と共々に三福田にタネを植え続けてゆく所存ですので、今後共何卒よろしく御支援のほどお願い致します。

胎蔵界曼陀羅

善光寺蔵

賀泰志君得度



泰志君の得度を賀す

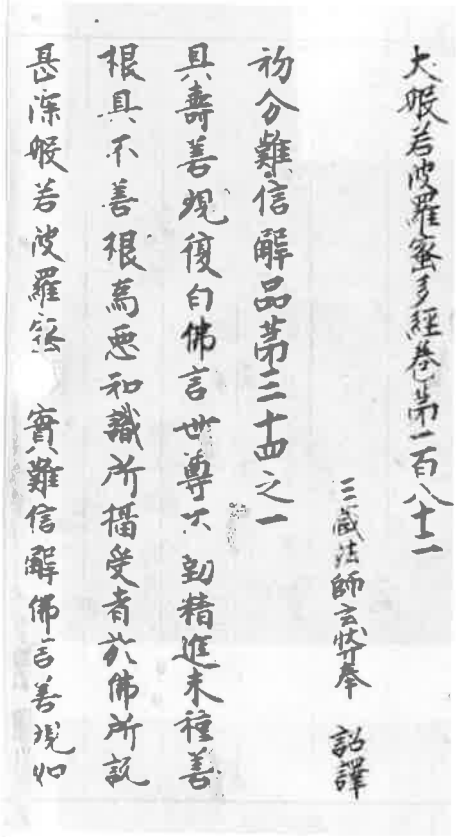
道力の生涯、福田を耕し
二男、染衣して勝縁を結ぶ
法燈不滅、大詠の頌
成寿山頭、心月圓かなり

〔解　説〕

方丈さまの道力に満ちた生涯は次々と福田を耕しておりますが、二男の泰志君が得度して、さらにすぐれた縁を結ぶことになりました。泰志君、名を改めて大詠となり、法燈不滅のかたちとなり、成寿山善光寺には真如の月が圓かに輝いております。

タイ
ワット・パクナム訪問

ワット・パクナムにて


大般若波羅蜜多經卷第一百八十一

三藏法師玄奘奉　詔譯

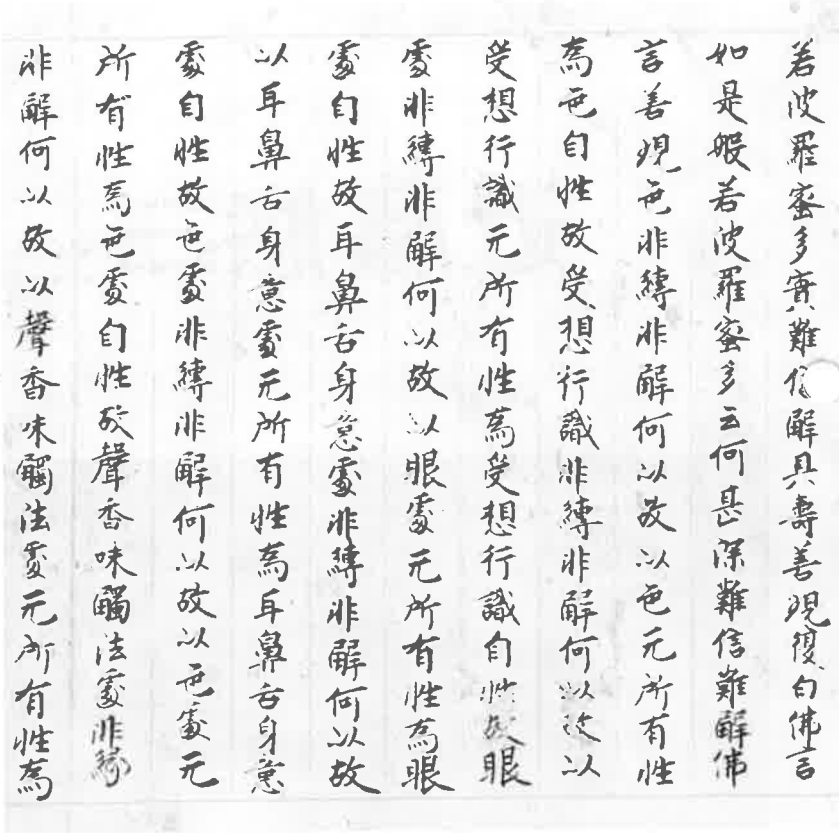
初分難信解品第三十四之一

具壽善現復白佛言世尊大勤精進未種善根具不善根爲惡知識所攝受者於佛所說甚深般若波羅蜜　實難信解佛言善現如

熱い波紋

赤間　義徳

大般若経六百巻
いま　解繙され
方丈さまの誓願は
いま　ひもとかれ
経文転読の声は
不動殿に響(とよ)めく。



若波羅蜜多實難信解具壽善現復白佛言
如是般若波羅蜜多云何甚深難信難解佛
言善現色非縛非解何以故以色元所有性
為色自性故受想行識非縛非解何以故以
受想行識元所有性為受想行識自性故眼
處非縛非解何以故以眼處元所有性為眼
處自性故耳鼻舌身意處非縛非解何以故
以耳鼻舌身意處元所有性為耳鼻舌身意
處自性故色處非縛非解何以故以色處元
所有性為色處自性故聲香味觸法處非縛
非解何以故以聲香味觸法處元所有性為

耳を澄ますと
その声の深いところから
鉄眼国師の読経がひびき
はるかに玄奘法師の読経と共鳴する。
耳を未来に転じると
二十一世紀の不動殿から
大光さまの若い読経がひびき
横浜の一角に投げられた
誓願の熱い波紋は
青葉の空にひろがり
無数の星たちを揺らして
〈彼岸〉の岸辺を洗おうとしている。

鉄眼国師　江戸前期の僧。十年がかりで大般若経を含む大蔵経を出版。宝蔵国師。

善光寺収蔵品

近藤悠三

述　千（せんということ）

カラー■文殊・普賢菩薩……2
■福田に種子を種える……黒田　大圓　4
カラー■胎蔵界曼陀羅……6
■賀泰志君得度……8
■タイ　ワット・パクナムを訪ねて……9
詩　■熱い波紋……赤間　義徳　12
カラー■善光寺収蔵品・近藤　悠三……14
法話■大いなる誓願を抱いて……黒田　大圓　18
座談会■タイの僧院にて……34
■近藤悠三先生の茶碗……中村　正信　44
説話■嫁が憎いの、姑が憎いの……佐藤　俊明　48
レポート■タイ・サンガにおける雨安居について……田中　智誠　50
カオ・パンサー雨安居を了えて……梅田　尚平　56
「月刊住職」より■……66
善光寺だより■……74
詩　■観世音声を限りに……遠藤　太禅

編集後記

●表紙絵・題字・カット　伊藤三喜庵
●写真　五十嵐千彦

大いなる誓願を抱いて

山主　黒田大圓

私がここに参りまして十七年目になるところでございます。最初は柱二本、六畳間ひとつで、どなたもここにお寺があるというようなことはまずご存じなかったようであります。たまたま縁がありまして私が住職をいたすことになりました。その理由といいますのは、私は栃木県の大田原の生まれでございますが、男ばかりの七人兄弟で、父親は、学校には入れてやるからあとは好きなようにやれと言うので、種々の縁がありまして坊さんになりました。先般横浜の関内にある工業高校から講演の依頼がございまして、そこでお話し申し上げ、それが活字になってますので、そのお話しはさて置きます。

私の実家は決して裕福な生活をしておりませんでした。はっきり申し上げまして、母親は大変苦労いたしました。父親が食べる物も食べずに、寺の地続きの山を、将来の寺の為にと買い求めました。今日では、お墓に分譲しても相当の額になりますが、三十年前の田舎のことですから、わずかなお金の額にしかならず、学資どころではありませんでした。父は先見の明がありましたが、それだけに当時の母はたいへん苦労しました。

父親が大本山総持寺の副監院という役をいただき、

常時留守にして居りました上に、ふだんの時でも、中学、高校には三、四人、又、大学には、二、三人行って居りましたから、金があるわけはないんです。そういう寺に生まれ育ったせいか、私は裕福になろうとか物がほしいとかつねに思ったことはないんです。ただ皆様に迷惑をかけたくないということを念じておりました。長男、次男が東京に出て、叔父の家に居候して大学に通わせてもらってましたが、いくら親戚でもいい顔するわけありません。そこで父親は、子供の大学教育のためには、東京に建物を建てなけりゃみんなに迷惑をかけるということで、一大誓願を立てて寺を作りましたのが、五反田の〝桐ヶ谷寺〟という寺であります。私はそこから大学に行きました。学校に行くのに、目黒から目蒲線に乗るんですが、運賃は十円でした。当時十円あるとパン一つ食えますから、金が無いとそこを歩きました。渋谷から駒沢まで、バスだと往復三十円、片道十五円、玉電に乗りますと二五円で五円やすいんです。安い電車に乗って節約したものです。

寺と申しましても名ばかりの小さな寺であり、収入も充分でなく、生活に困るような事もありました。その当時は、お墓を二万五千円でおゆずりしても、一時に支払いをしてくださるような方がいなかったのです。それを分割で三千円位づつ払っていただいたんです。それほどにお寺の経営は大変なものがありました。

それで長兄が目黒の不動さんで、滝に当ったんです。食えない寺だからお寺がよくなるように、一生懸命ご祈禱したのですが、それで倒れて死にそうになり入院

しました。痔が悪く、出血多量で死んでしまうかもしれないと言われましたが、元気になり再び滝に当たり、なんとか食える寺にしたいと祈禱いたしました。ここで私はお不動さんというのをはじめて知りまして、長兄だけにそれをさせては悪い、私もお参りしなくちゃと、毎朝行ったんです。目黒の不動さんといえば有名なお不動さんで、私の住んでいた寺からだいたい十二、三分、急ぐと七、八分ぐらいで行けるんです。毎日ただお参りしたんですが、その時に何かお願い事をしなきゃいけないと思いました。兄弟が多く、私は六男坊で、あまり役にも立たないから父は「ろくでなし」とよく言ってました。親にそこまで言われましたので常々私は親はあてにしないで生きていきたいと心に念じて居りました。

〈思いは世界へ〉

どこか行こう、こんな狭い六畳ひと間ぐらいの寺に、兄弟五、六人いて学校に行ってもしょうがない、世界中まわって勉強したいと、お不動さんに毎日頼みに行ったんです。たまたま私の兄が、最初に因縁を作ってくれましたんで、毎日行っている間に、自然に行かないと気持悪いようになりました。大学、大学院も終わり、総持寺に安居をいたしました。そして、今度は、アメリカに行こうと思って、ロスにいる兄に連絡したら、「半年ぐらいの修行で何だっ！」とどやされて、仕方がないから永平寺へ行ったんです、それから日本一周をいたしまして、また、総持寺に行き、修行を三年致しました。そして三年目の時、何処か外国へ行きたいという気持ちが高まって居りました時、友人に「おいっ黒田、インドへ行こう。」と言われました。

――そうだっインドだ、と思ったんですが、インドへ行くだけで当時五十万円かかるんでした。二十年前の五十万円ですヨ。とてつもない金です。それで私は、総持寺にお金を貸してくださいとたのんだんです。そしたら、総持寺ではいくらいるんだと言うんで、百万円貸して下さいと頼んでみました。

当時日本中から五人、特別僧堂といって特別に修行する人が集まって居りましたので、一人に二十万円を出してくださいとお願いした訳なのです。よし、貸すと言うことでした。ところが、いよいよ手続きがはじまったら、前例がないから貸せないというんです。困りまして、私はナリスに頼むしかないと考え、草鞋はいて出かけたんです。そしたら、「先生、何しに来た」と言うので、「ちょっと話をしたいのです」と言うと、「じゃ、あがってください。いまたくさんの社員が集まって、研修会をしているところで、これから講演の時間なんです。何でもいいからとりあえず講演してくださいよ」と言うんで、講演することになって一時間しゃべりました。講演が終わると「ところで先生、用件は何ですか？」と言われましたので、「お金を貸してほしい。必ず返しますから」と頼んだ訳なんです。「で、幾らいるんですか」と言うから「五十万円位必要なのです。」と申しました。すると困ったような顔をして、当時の営業部長さんが、「五

十万円ですか……。じゃちょっと待って下さい」と社長さんに相談してくださったんです。社長さんは、「今日はとりこんでるから、考えときましょう。改めておいでいただきましょう」とおっしゃいました。

〈一葉観音との出逢い〉

このお話をお願いに行く前に、私は永平寺におりました。永平寺と総持寺の特僧（注 特別僧堂の修行者）の交換研修があったんです。実は、これは私が提唱したものでした。

研修を済ませて、ナリスに行く前に永平寺の駅に出て、時刻表を見ていたら、その下にウインドケースがあり、その中に一葉観音と言って、一枚の大きな葉の上に観音様が乗っている彫り物があったんです。素晴らしいなあと思いまして、駅員室に入り、「これは誰が彫りましたか？」と聞いたら、山口元董と言うおじいさんだといわれました。何処にいますかと聞いたら、すぐ近くにいるというんです。「しめたっ」と思って尋ねてゆくと、七十ぐらいのおじいさんが、腰を曲げて出て来ました。私は、「駅で非常にすばらしい観音様を拝見しました。何か彫っていただきたい」とお願いすると、「わかりました。」と言うんで、それでは、「駅にある一葉観音様を彫ってほしい。ただあのままではなく、これから私はインドに行き、タイ国で修行するので、いつも携帯できるように、形を小さくして彫ってほしい。」とお願いしたら、よいと言うんです。私はその時、二十五歳でした。二十五歳になっても何も世の中に遺していない。私がもし遠くで死んだらその仏様だけは帰って来れるということと、もうひとつは道元禅師さまの故事を有難く思ったからです。道元禅師は今の中国、当時の宋の国に渡られ、命がけの御修行をなされ、天童山の如浄禅師のもとでお悟りを開き、二十八歳の時日本に帰られるのですが、映画〝天平の甍〟で御存知のように木の葉のような船ですから台風に逢えばひとたまりもないのです。道元禅師の乗った船も暴風雨に遭って、あわや遭難……その状態に

なりました。その時道元禅師は一心に観音様を念じ、心静かに読経いたしました。すると、一枚の木の葉に乗った観音様が天から下りて来た、とみるや波が静まったと言うのです。

こうして道元禅師は救われて、無事日本に帰って来られました。その、道元禅師を救った仏さまが一葉観音様……。これだ、おれはこういう生き方をしたいと思い、おじいさんにお願いをして一葉観音を彫ってもらうことになったんです。

〈お不動様との出逢い〉

その時、おじいさんが「あんた何処の人だ」と言う。私は「目黒です」「東京の目黒か……。じゃ、あんたは目黒不動の子供か」「いや、目黒不動のせがれではないが、でも毎日お不動さんに行ってました」と申しました。「そうか」と言って、私の顔をみて、「あんたに頼みがある」というんです。「なんですか?」と言うと、「あんたお不動さんいらないか」と言う。その時は、お不動さんほしいなんて夢にも思っていなかったです。そしたら箱に入れて持って来てくれたのがこのお不動さまなんです。「あんたに任せるから何処かに持って行って売ってくれ」という。「おじいさん、いくらですか」と言うと「いくらでもいい、材料代だけ欲しい。」というんです。そのおじいさんがこんな話をしてくれました。

「私は、お不動さんを二つ彫った。一つは、日本一の鉄工場の社長さんに彫った。その人はまさに日本一になった。もう一つ、いいほうは残した。ところが、ごく最近のことだが、四国に霊媒者のおばあさんがいて、そのおばあさんが、ある時尋ねて来て、いうには……福井の山の中に大きな寺がある。そのふもとに霊験あらたかなお不動様があるから、早くそのお不動様をお迎えしろとお告げがあった。それで永平寺にやって来て、この近所に仏師はいないかと聞くと、いますとのこと。どこですかと聞くと近所だと言うので私の家にこられたのですが、霊媒者のおばあさんは、私に

こう言うんです。

「ここにお不動様がありますか。あったら見せて下さい。」お見せしたら「まさに私が夢に見たものだ。どうしても、譲ってほしい。」とおっしゃいましたが、私は、これは、あんたには譲れないと断ったんです。そしたら、とても残念がって、おばあさんは帰っていったが、それ以来気になって、夜も寝れない。死んでも死にきれないと思っていたところに、丁度貴方が来てくれたのでまかせる。」

と言ってお不動様を私に任せられた。

〈ナリスに借金〉

ところが、私には一銭もお金が無い。ナリスが果たして五十万円貸してくれるだろうか。

たまたま、父親が、全日本仏教会の事務総長という役職についておりまして、京都に出張しておりました。その折、ナリスより、お金の用意ができたという連絡をいただきましたので、父にも同道してもらいナリスに参上しました。そしたら大きなお盆に紅白ののしをつけて〝成寿堂本舗ナリス化粧品〟と書いて、私ども父子のところへ持って来て下さいました。ところが見たら、のし袋がペシャンコなんですネ。〝まてよ。私は五十万円っていったのに間違えたかな?……。もし一万円か二万円だったらどうしょう。いまのうちに言わないと……。帰ってからお金がたりないなんて言えないし、それを受け取るか受け取るまいか……。しかし不安だ……。入れるの忘れたんじゃないかな〟と思って、取ろうか取るまいか迷っていたら、おもむろに〝どうぞ〟と言うんで、私も〝ウワア!……。これ開けて見ようか、いくら入っているのか聞こうか〟とドキドキして……。〝イヤッ……、こんなに薄いわけないな〟と思って、おやじの顔見たら、おやじはだまって、目をつぶっている。困ったなあと思ったが「ありがとうございました」と言っていただいて帰りました。おやじはまだ用務があったので別れ、駅に来てカバンから出して中を見ました。入ってなかったらどうしょ

うと……。そしたら、どうでしょう。入ってました！五十万円の小切手が……。「バンザイ！」ととびあがりました。その姿を見た道行きの人々はおどろいておりました。

うれしくてうれしくて、五十万円に何度も合掌しました。それが私の最初の大感激でした。

〈お不動さまはどこへ…〉

よし、これで行けると……。さて次はお不動さん、お不動さんを買ってもらおうと思って家に帰った。そしておやじに、まず五十万円もらって来ましたと伝えましたら大変喜んでくれました。そして、おやじさん、もう一つお不動さんのことなんだけどと話したら、おやじはいらないと言いました。どうしてかと聞きましたら、「光真寺には子育て地蔵をおまつりしている。何故なら、長男が死んでいる……おふくろが、三番目の子供のお産で長野の実家に帰っている間に、大田原の方の留守番をしている他の方が、四歳の長男に、「独りでかわいそうだから」と、その当時めずらしかったバナナを食べさせたところ、食べすぎて死んでしった。その化身が子育て地蔵としてまつられてあるし、それに、日光の輪王寺に縁があったそこのお大黒さんも光真寺にまつられてある。だからお不動さんはいらない。」と言ったんです。私は困りました。引き受けてしまったけど困ったなと思って居りました。その後、おじいさんから電話がありまして、観音様を取りに来いと言うんで、一応取りに生きました。インドに行く金はできましたが余分なお金は一銭もありません。そこで知り合いに、必ず返すから十万円貸して欲しいと頼んで、それを持って取りに行くことになりました。しかし、一切合財で十万円ですから、往復のキップ代一万五千円ほどです。「まあ、先生、金無いなら材料費だけでいい」と言って下さって、私が身につけて世界中持って歩く一葉観音さま、それに一万五千円支払いました。残りましたのが、このお不動さまのお代であります。残り七万円しかなかったんです。で、おじ

いさんに、「私の全財産は七万円しかない。これでいいですか」と言うと、「そうか……七万円か」と言う。「もう少しくれないか」といわれましたので、「どれぐらいですか」とたずねましたら、「あと二万円でいいから出してくれ」と言われました。私は十万円しか借りて来ませんでしたから、「今はこれしかありませんが、しかし、必ず送りしますけど、今日明日では、都合がつきません。」と言ってお不動さんを抱いて東京の桐ヶ谷寺に帰ってきた。寺についたのは夜十時くらいでした。そして、お不動さんを開けて、飾りましたら、これがとてつもない力を感じました。これはすごいことになりそうだと思って寝ました。

〈お不動さま光真寺へ〉

父親は朝たいへん早いんです。私がまだ寝ている間に見たんですネ。そして私が五時すぎに起きると、お不動様にはお水が上げてありました。そこで父に挨拶をすると、

「武志、あのお不動さまはすごいな、あれはいいお不動さんだ。なんとかしよう。」と言うことになりました。

「お父さん、あれはまだお金を払わなくちゃならない。」と言うと、いくらだと申しますのであと二万円ぐらい

欲しいと言うと、光真寺の兄のところから出してもらおう。桐ヶ寺ではお飾りしてお寐りするところが無いから光真寺におかざりしようと。そしてお前の費用の足らぬ分は光真寺から出してもらおう。ということで、父は田舎に出掛けてゆき、母や兄と相談をしてお金をくれました。それで光真寺にお納めさせていただいた訳です。

〈外国修行〉

行くなら、私は、インドだけではもったいない、タイで修行しよう。どうせやるんだから誰にも出来ないことをやろう。と友人と相談したんです。その友人が石附周行氏で、一緒にインドに行く事になり、帰りにタイで修行を致すことになりました。

その後、タイに滞在中、管長の秘書の役目を仰せつかりましたので、帰国して、曹洞宗の管長高階瓏仙禅師という方の秘書になりました。ところが私は、こういう風な野人ですから、型にはまったことをするのが性に合わないんです。偉い人のおそばに仕えている人たちというのは、虎の威を借りる狐といいますか、自分が偉いと錯覚をおこすんです。不思議なもんですね。稲穂は実れば実るほど頭を下げるんですが、それのわからない人たちは、稲穂じゃない。そんな訳でやめたけれど行く所がなかったんです。

そこで一生懸命努力して、アメリカにコネをつくって、兄貴のところへ行きました。一回アメリカで映画に行ったら手紙も出す事ができないような生活でございました。だから、映画にも行かなければ、何処にも行かない。やったことは本読みだけ、あとは日記をつけた。今日まで、三十年間書き続けた日記は大変な量になっております。やることないから我慢しました。我慢して我慢してアメリカに二年余いました。その代わり、やることないから日本の宗教新聞に記事を書いて送りました。

――人生は修業だ――と、自分にいい聞かせて我慢したんです。

〈貧しい帰国〉

そのうち、石附君が結婚するといってきました。よし、今がチャンスだと思って、日本に帰った。ところが居場所も無ければ食べ物もない。東京の小さな寺ですからね。

アメリカの生活の中で大誓願をたてました。日本に帰ったら、何処か、でかいところがないか。山でも野でもいい。毎日、天に向って祈る毎日を過ごしながら、日本に帰ってきました。

ところが結婚式に出るのに着てゆく背広がなかったんです。それで私は、おやじに背広を買ってもらえないかと頼みました。二月六日に帰って、九日が結婚式、土曜日に帰って来て、日曜、月曜、火曜日が結婚式なんですネ。そうしますと、帰って来て次の日は、親に挨拶しなきゃいけないし、時間もなかったんです。

「おやじ着る物がない」って言いましたら、

「しようがないなあ」と言って松屋で背広を買ってくれました。私はその時やせてまして、五十七、八キロしかなかったんです。いまは、六十四、五キロぐらいはあるんです。しかしその当時、大変やせてましたので、女の子に聞いたらその時はやりのピッタリしたのがいいということで、二万八千円の背広を買ってもらいました。それを着て結婚式へ行きました。背広は真新しいんですが靴はやぶけてたんです。アメリカのお医者さんに二十五ドルで買ってもらって一年半はいたものですから。

そして、結婚式では挨拶をしました。私の靴だけやぶけているんですネ。はずかしかったですネ。管長さん達がずらっといる中で……。「いやぁ黒田、帰って来てよかったな。」「はい、帰りました。」ふと足見たら、一、二センチやぶけているんです。脇のところが……。

一足三千円位の靴ですがね。それを買うお金がもったいなかったんです。ましてや、背広を買ってくれた父に、靴も欲しいとは言えなかった訳です。相当愉快な格好だったと思いますヨ。

〈善光寺設立〉

その後、四月になってからですが、善光寺の前身であります長光寺の林方丈様がなくなって、後継ぎがいないと言うことで、どうかという話があったんです。小さな建物で四百六十万円だという。大変なお金でした。一銭のお金も無い。着の身着のままで帰ってきて、背広をやっとおやじに頼んで買ってもらって、一銭もない。四百六十万円なんて気の遠い話でした。それでも、見るだけでもと思って見に来ました。そしたら、建物はくさり、屋根のかわらは流れおちガラス戸はメチャクチャでどうしようもないところでした。いやいや、高い買物だなあと思いました。しかも土地は別でしたが私はこれを買う決心をしました。それで私は、おやじのところへ相談に行き、桐ヶ谷寺で働かせてもらう事にしました。それで一生懸命東京の桐ヶ谷寺で働きました。さいわい三ヵ月間毎日仕事があって忙しかったので、よし、これで支払いができるメドがつい

たと思いました。一日三回東京と善光寺を往復したんです。

私は、朝七時に、倫子に全部一日の仕事をいいつけて、ネクタイをしている間に手紙を書かせ、それを持ってバスで上大岡に行き投函して、そのあと、電車で品川より五反田の桐ヶ谷寺に向かい、法衣をつけて、火葬所の読経を致しました。そのあと着替えて、十一時には善光寺に戻り、公園墓地の読経をいたしまして、中食を済ませて、桐ヶ谷寺の一時の法事に間に合うように東京に向かいました。三時には、全ての仕事を終えて再び善光寺に戻り、七時からは又、桐ヶ谷寺の通夜に間に合うように出掛ける、一日に東京と横浜を三回も往復するということが続いた訳です。

若いから出来るのですね。そうやって借金を返し続けた訳です。人間は働かなくちゃダメですね。

そうして、一生懸命やって少しづつ皆さまの御信頼を受けるように努力させていただきました。一年半目になった時、光真寺から皆なで来てくれました。母は今年八十三歳になります。最近は「善光寺の方丈さん」と私を言うんですが、むかしは「たけちゃん」と呼んでいたんです。母親はいいですね。やっぱり、親に心配かけたくないし、皆さんにうしろ指さされないように一生懸命がんばりました。

そんな訳でしたので、何もほしいと思いませんでした。長兄が「武志が田舎から出ていって、横浜に寺を作ったんだから、皆んなで行ってやろう」と言う事になり、何もやる物ないからお不動様を上げようと、バス一台にお不動さんと、実家の世話人の方が乗って来てくれました。

〈不動明王勧請〉

それで、今日があるんです。毎日毎日、お不動さんにお礼を申し上げて居ります。本当にありがたいことでございます。それから田中先生という霊能者のおばあさんが、私を大事にしてくれました。私が今日あるのは、お不動様とそのおばあさま、そしてナリスさん

と皆様のおかげです。お不動さまをお迎えしてから毎月二十八日、誰が来ようと来まいと、十七年間一度も休まず精一杯おまつりさせていただきました。かならず誓願が成就すると信じて……。

前に申し上げたように、私はここに来て願いがかなわなかったことはほとんどないんです。全て、お不動さまがして下さいました。いいですか……。人間は自分がやるんじゃないんですよ。仏さまがしてくださるのです。これがわからなくちゃだめ。そうですよネ。

田中先生が、十七年前に私に言われました。「あなたは横浜に行きなさい。努力すれば、必ず道が開けます。そして、お不動様をしっかりとおまつりしなさい。」と……。

田中先生のお告げによると、このお不動様は身を七つに変じて、いかなる災難も救ってくださる。南無身変わり不動明王様であると……。教えてくださいました。

田舎からお不動様をお迎えする日の朝方、私はこんな夢を見ました。

本山から私に電話がかかって来まして、当時、大本山総持寺の顧問会会長をして居りました父に至急連絡してほしい。総持寺が火災で燃えているというんです。私は、それはもう驚いて、父と連絡を取って二人で本山にかけつけてみますと、シンと静まりかえって、火事の気配は全くないんです。ところが中に入って長い廊下を歩いて行きますと、廊下の中心のあたりに、お不動様の台座だけがポツンと異様に置いてある。台座だけを残して、お不動様は焼けてしまっているんです。これは、お不動様が身を変じて総持寺をお救い下さったんだ。父と二人、心から感謝し合掌して家に帰ったという夢なんです。

〈釈迦殿完成〉

私がここの善光寺に来て、つねづね欲しいと思ったものがありました。それは前の地続きの土地でした。前の土地がなければ善光寺は、次の代に伸びられない

と思って、毎日歩きながらお経をとなえて居りました。前の家に住んで居られたおじいさんは、軍人さんで、とにかく一徹な人で、山が崩れて家がかたむいても棒でつっかえ棒してでも住み、がんとして動かないような方です。しかし、縁がありまして、この土地を善光寺でお使いくださいと申し出があり充分お礼を申し上げてお譲りいただいた。これも本当にお不動さんのおかげでございます。

土地を買い求めてからは、全てが、順調に進みました。一銭のお金もありませんでしたが、銀行では五千万円の土地代を貸してくれました。土地がある事だし、早く建物を建ててはどうかと勧められまして、釈迦殿建立を誓願いたしました。

私ははじめ、七千万円の寄付を仰ぎましたが、工事をはじめましたら、檀徒の方々のおかげで、二億七千万円のお金が集まり、現在の釈迦殿が完成したのです。

総工費、三億七千万円かかりましたが、とにかく、無事円満に解決いたしました。

これはお不動さんと皆さんのおかげです。私は何もして居りません。こちらの不動殿も直そうと思って居りましたところ、最初に工事をしてくれた田舎の大工さんが、とにかく任せてくださいといわれるので、百坪近くの増改築を、三ヵ月程で完成させてくださいました。五千万円近くかかりましたが、何とか支払いの目安がつきました。本当にありがたいことであります。

〈大誓願を抱いて〉

只今、たくさんの借金を抱えて居りますが、元気に頑張って居られるのも、お不動様と皆様のおかげであります。その報恩行として、善光寺は海外留学僧派遣育英会を発足いたしました。なぜかと申しますと、これから必要なのは、世界に通用する人物だと信じるからです。

今日も、毎日新聞の全国版で紹介されて居ります。日本中の人が注目して居ります。

タイ国に田中、梅田両師を派遣いたしました。優秀

な方たちで、道心を持って修行していてくださいます。本当にありがたいことです。只今は、アメリカに留学する人々を募集して居ります。

善光寺は裕福な寺ではありませんが、どんな苦しい事があっても、これをやりとげたいと思います。

〈仏の世界へ〉

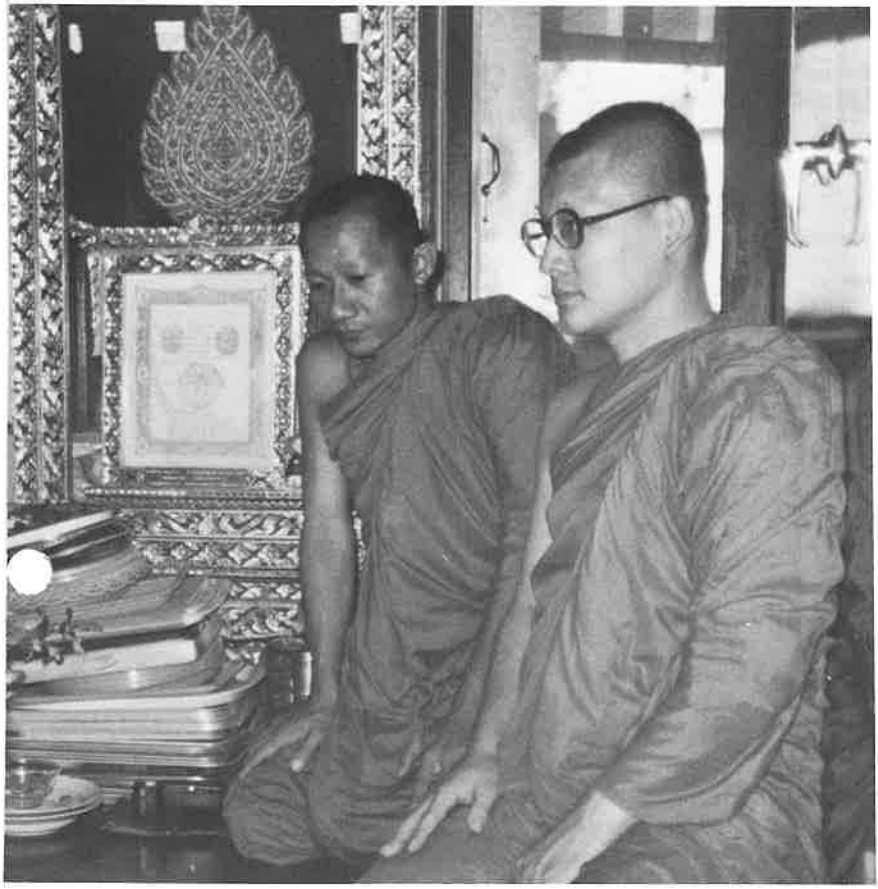
人間は死がないですよね。許されて生かされているんだから……。永遠に大誓願を持って生きて行きたい。何もしないまま死ぬ訳にはまいりません。絶対死ねません。みんなもそれぞれに頑張ろう！ボーッと生きていてはもったいない事ですものね。

お前は変わり者だという人もおりますが、変わり者じゃなきゃできないと思って私はやっているんです。小さな世界、心の卑しい人とつきあっているのは淋しいことです。さいごに仏の世界に導かれて、心豊かな生活が出来るよう精進しよう！どうぞ、おおいに精進をして、努力して、命の尊いことに目ざめて、先祖を大事にして生きていきたいものです。このすばらしい因縁ほど世界中どこさがしてもない。これが一番すばらしいと思って生きてほしい。家では、夫婦円満に、仏さまは大事に、子供たちと共に仲良くしてほしい。

今日の話はこれで終わりにしたいと思います。皆さんのおかげです。本当にありがたいことです。重ねてお礼を申し上げます。

の僧院にて

留学僧　田中智誠
留学僧　梅田尚平
山主　黒田大圓



●海外留学僧との対談

タイ

方丈＝お二人にこうして現地でお会いできたことは大変うれしいことでございまして、ご住職にもお目にかかってお二人のご様子をお伺いして、私なりに意義のある事でございました。

安居中に会えたという事は非常にありがたいことで、お釈迦様並びに歴代の猊下に感謝を申し上げます。この育英会も日本ではかなり注目されておりますし、明年はアメリカに留学僧を送る計画で広く募集しております。タイからアメリカへ、そしてヨーロッパ、中国へという段階を経て行きたいと思っておりますが、お二人の貴重な体験を今後の為にも皆さんにお伝えしたいと思っております。

前回の〝成寿〟で、私が二十年前にバンコックで修行しておりましたことを発表いたしましたが、最近そうした体験を発表する方が少ないものですから、皆様にご好評をいただきました。

ついては、お二人のタイでのご様子を記事にしたいと編集部から要請がございましたので、いくつか質問をさせていただきたいと思います。

日本の仏教とタイの仏教は、形を異にしております。戒律を重んじるタイの仏教の中に入って、修行で苦しかったことは、どんなことでしたか？修行ですから苦しい苦しくないというのはないんですが、いかがですか？

田中＝日本の禅門にも結制安居がございまして、九旬間安居といって、移動を禁じておりますが、これは南方の仏教の形態が伝わって、日本では修行の基本になっているわけですから、不便がある事は事実ですが、私の場合は特別、大変だということはありません。

方丈＝禅宗の田中師のご意見でしたが、浄土宗の梅田師は、はじめてのご経験もあろうかと思われます。婚約者を日本に置いていらしたという事情もおありですし（笑い）いかがでしょうか？

梅田＝日本で、私なりに考えていた戒律仏教と、実際に黄衣をまとって二二七の戒律の生活をしてみたちがいというのはありました。戒律仏教というと、日本の内情からみると、大変だ、苦しいという先入観がありますが、こちらでは、気候とか自然環境といったものせいか、開放的で非常に明るい感じをまず第一に受けました。

当初、四月に着きましたから、真夏の気候に体が慣れるまで、約一ヶ月ぐらいは苦しかったですね。あとは食事の面ですが、食べ慣れた日本食からいきなりタイの食事にと……。はじめは托鉢もしておりましたが、お寺の食事にも慣れて参りますと、ボチボチおいしくいただけるようになりました。非時食戒（注、正午過ぎには固形物を飲食しないこと）のほうもはじめの頃は空腹感もありましたが、徐々になくなってきまして、もう今では、その方が体も調子がいいというような状態で、今となっては別段苦しいというような事はありません。

方丈＝四月にこちらにいらしたばかりですし、こうい

う質問は適切ではないかもしれませんが、日本の僧侶に対してタイの民間人はどんな感覚を持っているとお感じですか？

田中＝微妙な問題でもありますけれど、長年タイ僧伽に籍を置かれているこちらの比丘衆におかれては、やはり不信感を持っておられるような気がいたしますが、大同団結して、我々が出向いた形になって居りますので、日本の僧としてかなり好意的に対応し、好感を持ってくださっていると感じます。

方丈＝タイ僧からみた日本の僧侶への反応といったものはどうお感じですか？

梅田＝私自身もこうして黄衣をまとっていますので活動的には小乗仏教のお坊さんに違いはないんですが、われわれはタイに着きましてから得度式までの時間が短かったということもありますし、お寺に住まれる在家・ウバイ・ウバシカ・サミー・メイティラ・比丘方も、私たちの一挙手一投足を、大乗仏教のお坊さんとして接することが少なかったと思いますので、そうい

った反応を直接彼らから聞くことはできなかったんですが、一度彼らにアンケートを取ったことがあるんです。

一六一人のうちに解答者が九五名ありました。解答の中で一番多かったのが、日本のお坊さんに対して、きびしさという面を挙げています。それはどういうところから受けたのかと申しますと、テレビで一休さんとかマンガなどがありまして、そんな影響もあろうかと思います。

タイ人のお坊さんから見た日本の仏教というものに関しては、性格上からいうと、大乗も小乗もかわりございませんので比較的理解はされていると思うんですけれど……。

方丈＝タイ僧の日本の仏教によせる思いというか、そのあたりはいかがですか。

田中＝一般論になりますが、タイの東南アジアにおける立場とか世界的な立場にしても、よく民族的高揚というかナショナリズムといいますか、言語に関する政

策としても現れておりますが、仏国、仏教による国という優越意識というのがございまして、異国のものと比較対照するという知識というのは、ごく一部の学問僧の中以外には、そうした雰囲気は感じませんでした。方丈＝タイに来て仏教観に変化があったり、僧侶としての自覚に加わってくるものとか、そういう面でお聞かせ願いたい。

梅田＝大乗の方では菩薩道を強調しますので、お坊さんといえども、人の為の働きというのを非常に重要視する訳ですけれども、それは結局自利利他のいわゆる菩薩道に通ずることなんですが、タイのお坊さんはそういう面では自己中心的な面が多いので、ただ、日常生活の上では、戒律を守るという事がまず第一に重要なポイントとして長い間伝統を守っておられる仏教ですから、そういう面では非常に違いがあります。

日本の仏教は、気候風土その他、タイとはちがうんですが、やっぱりタイの仏教がそのまま日本で通用するかというのは問題だと思います。

田中＝大勢で生活する場としてのお寺の秩序ですね。中堅僧の方々は、自分に課せられた役目だけ果たしてそれ以外はお互いに関知しないというところがありますね。特に沙弥などに対しての指導というと、日本ではかなり積極的に上から指導して行きますが、見て見ぬふりといいますか、少々物足りなさを感じます。具体的な目標というか僧侶としての第一義として、日本の場合と比較しますと、物足りないと思います。

方丈＝タイの風土になぜ二千数百年にわたって上座部仏教が根づいているかということを一言づつお聞きしたいと思いますが。

梅田＝同じ仏教にしましてもビルマにしろ、タイ、カンボジア、そのいろいろな国によって特色がありますけれど、タイに限って申しますと、やはり、土着信仰といいますか、そういったタイの古くからの信仰と仏教がうまく結びついて、形を変えながらも生きてきているといわれますが、それが果して本来の上座部仏教の姿といえるのかどうかは疑問だと思います。その辺

が今後の問題になるところだと思います。

田中＝この問題に関しては簡単に語れる問題ではなく、かなりむつかしい問題ですが、ビルマとタイは上座部仏教を語る場合に、かたや自由主義かたや社会主義という事で、対照的な訳ですが、歴史的にはおなじように、ビルマも長く王政が続いておりましたし、国王によって仏教が保護されて、量的に仏教徒のしめる割合が非常に多いわけで、今日仏教を抜きにして国を語れないという国であります。

大乗・小乗という事になりますと、日本とタイというのは対照的な関係になりますし、カトリックとプロテスタントの関係を借りていえば、カトリックがタイ・プロテスタントが日本という感じで、形をとるか中身をとるかというところで、日本は現実の生活に合わせて精神的な面を尊重する。タイの場合は、地理風土の関係で両極分解しているという現状と把握しています。

方丈＝お二人が貴重な体験を持って帰国されたのち、これは生かしたいなと思われることがあったらお聞か

せください。

田中＝一番強く感じたのは形の素晴らしさ。形式にとどまらず、形を超えた素晴らしさというか、形になりきっている素晴らしさというのは、ちょっと真似のできないものがあります。たとえば、合掌する姿とか、一般の、若い僧に対する敬意の払い方とか、又、今日、タイにおける仏教がここまで来ているというのはもちろん上からの庇護もありますが、一般大衆によって守られ、励まされているという面もございますので、形式にとどまらず、形の中で日本が見習うべき素晴らしいものがあると思います。

梅田＝日本の仏教はどちらかというと宗祖仏教なんですけれども、私自身として、釈尊に還るといいますが、もう一度その時点に還って、釈尊のみ教えを見直したいと考えています。やはり真実のものはパーリ教典の中にあると思いますので、帰ってからでもこの教典をひも解いて、自分なりによく味わって、そうしてその言葉を一般の方にも広く識っていただきたいと、そのよ

うに考えております。

方丈＝お二人のそうしたご意見を今後の僧侶としての生活にふまえて〝Boys be ambitious〟のambitiousをどのように抱いていかれますか？

梅田＝やはり今回幸いにご縁をいただきまして、上座部仏教の実践をさせていただきましたので、今後何らかの形でタイの仏教と日本の仏教の交流、発展の為に、微力ではありますが何らかのお役に立ちたいと、それを将来の自分の志としてやって行きたいと思います。

方丈＝ありがとうございます。

おおいに両国の仏教の為に、釈尊のみ教えの為にお力をお貸しいただけたら、こんなにありがたい事はございません。

田中＝こちらの留学を通しての収穫というのは、当初私の課題でもあったわけですけれども、漢訳仏教、中国仏教の流れを汲む日本の仏教で納得いかない、しっくりいかない、わかりにくい事柄とかいろいろあったんですが、若干こちらでの生活、またインドから中国を経て日本に至るまでの伝播を、はっきり把握する事はむずかしいですが、おぼろげながら手がかりになるような共通性とか、またこちらで生活をしてはじめて、今まで理解しにくい事柄も、直接パーリ語の解読による正統的なよりどころになるもの、仏教に徹して、若干ではありますがひとつのヒントといいますか目安が感じとれたんではないかと思います。

方丈＝ありがとうございます。

最後に、思いがけないタイの習慣、これは面白いなあと思うことやエピソードなど何かございましたか？

田中＝私は禅宗ですので、達磨さんというのは禅宗にとっては法を伝えられた大切な方でありますが、達磨さんという方は南方の人に違いないと思われるような、例えば、こちらの僧伽において、朝の托鉢の時の時間の計り方ですとか、これは、日本の叢林に中国を経て伝わっている古儀と合致するものがたくさんあります。たしかに達磨さんは、ビルマやタイでみられるお坊さんの共通項、やはり取材されたんではなかろうか

と感じます。それからもう一点、在家者が僧侶に対して、例えばお寺以外で施食を供養される経験をしたんですが、日本の京都なんかでは、そういう体験は、ちょっとできなくなっているわけですけれども、十数年前（?）までは、日本でもあったはずなんですが、托鉢僧、行脚僧に供養すると……。こちらは面食らったんですが、そういう貴重な修行をさせてもらえるという得がたい体験、これはもう日本ではできなくなっているんです。

方丈＝私も二十年前、日本一周行脚で大変親切にしていただいた経験がありますが、最近では行を積むとか仏祖の行復を行ずるということが現実として少なくなってきてるんで、淋しいなあと感じてるんですが……。

梅田先生いかがですか？

梅田＝半年の間にかなりいろいろ行事がありまして、それはやはり非常に比丘の役割というのを儀式を通じて民衆の心の拠り所という面で、お坊さんに対する接し方や考え方が日本の場合と違うと感じられた事、それから儀式に通じる一般の儀礼ですけれども、そういったものには本来の仏教にはなかった多分に呪術的なところも見られますんで、そういった面では、日本の場合とも共通項はありますが、もっと土着的な民族宗教になっていってるという危惧が感じられましたけれども……。

方丈＝長い間ありがとうございました。

とにかく無事に安居を済ませる事ができたというのは、ひとえに先生方のお徳のいたらしめるところと思っております。来年になりますと、お二方とも日本に帰られることになるかと思いますが、帰国なさっても、健康に留意されて、大いに仏法の興隆にお尽しいただきたいと存じます。

本当にありがとうございました。

タイ、ワット・パクナムにて収録

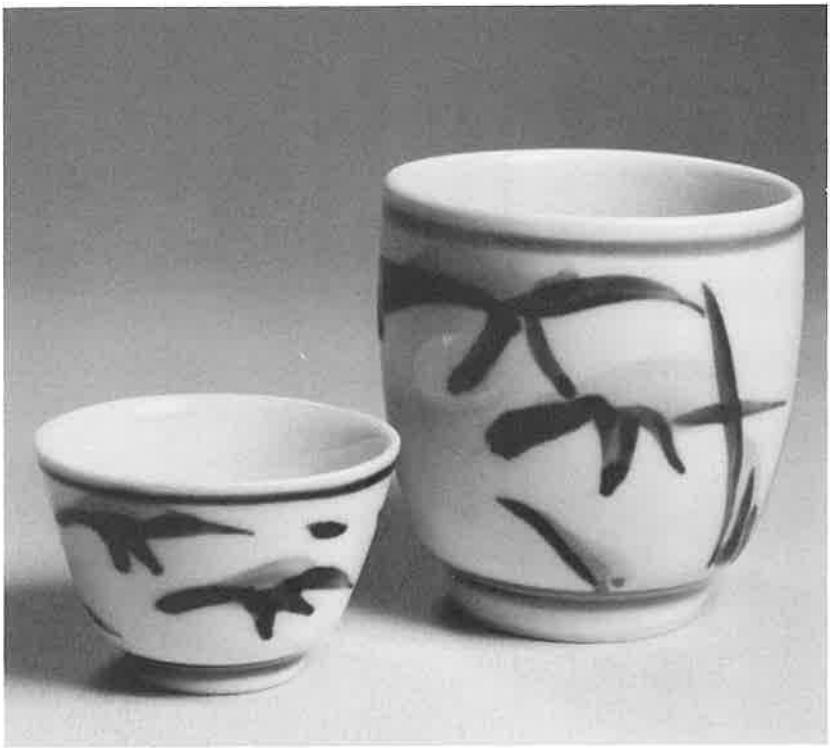
近藤 悠三 先生の茶碗

中村 正信

近藤悠三先生の茶碗は数が少ない。先生は『染付の人間国宝』であり一般には壺とか皿とかの大作の作家として知られている。又先生ご自身もよく申しておられたが『初めから茶碗だけやっていると片寄った作品となり良いものが出来ない。いろいろの作陶を重ね、これをこなし得てそして茶碗』と。

先生とは三十八年間の親交でしたが、先生は若い時から古今の名品を学び研究しており当時でもかなりの作品をつくっておられた。又方々に研究旅行をするとそこで茶碗もつくっている。朝鮮、相馬焼、志野、常滑、赤はだ焼、ペルシャ、伊羅保等、それに色々の灰釉系のものや、天目、赤地金彩、染付等がある。灰釉ものでは変わったところでは清水寺改修時の古い檜皮の灰釉を使ったものがある。

先生の作陶ぶりは、一つの命題を決めるとそれをとことん研究しそれが手に入るまで追求するやり方である。例えば壺に写す絵付にしても浅間山噴煙は七年、松は十五年、富士は二十年余の歳月を要している。夫々の壺の形と絵付の一体性を探究し納得ゆくまで追求してゆく。よく旅行先でも絵付用のスケッチをされていた。伊豆に遊んだ時のこと松のスケッチを朝から夕方迄写し続け何十枚となり、それを八畳間一杯に並べ



て二人で楽しんだことがある。富士は一度手がけたが霊峰富士の偉大さを十分写しとることが出来ないで苦節を重ね二十年余かかって漸く最晩年になって納得のゆく作品が出来、是れが今名品として残されている。

茶碗をつくるのにも同じ様な追求の仕方である。『ろくろを廻していると土が手に入り自然に寸分違わないものが次々出来るのにあきたらず真暗闇の中でつくっても同じものが出来た。然しそれが名品とは限らない』と。この様にろくろを徹底して研究していたから若い時に陛下のご前で京都代表としてろくろをおめにかけたこともあり、又大先輩である浜田庄司先生にろくろを教えた人でもあった。

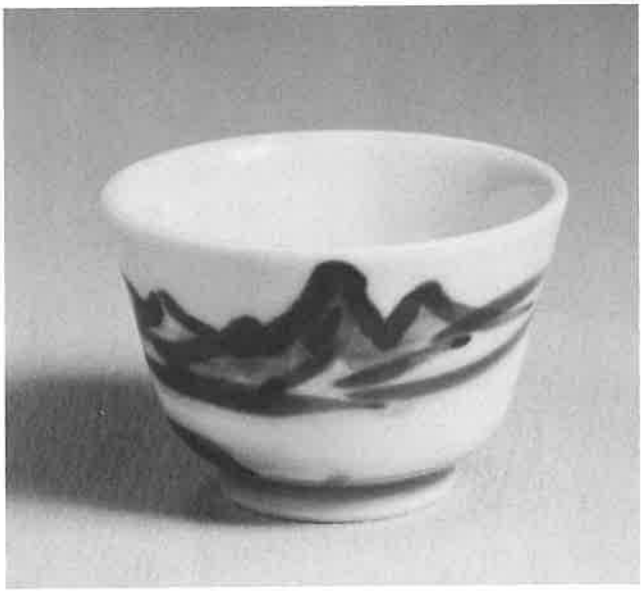
先生の茶碗はろくろが皆すばらしい。重心が低くのび〳〵と安定しており、そして温みのある作品である。

晩年になってから先生独自の世界である染付茶碗を手がける様になった。初めは土ものに試みていたがその内に最も難かしいとされる磁器に写し、更に追求してしぼり手の世界を手に入れている。

先生の染付はその雄渾な筆捌きがきわ立っているがそれを更にしぼり手に発展させ、深い味わいのものとしている。唯、数は極めて少ない。

先生とは二人でよく茶を汲み交しながら茶碗の育つ仮定を楽しみました。

茶碗は使って初めてどんどん変化し本当の姿をあらわすのだが、その



時先生の茶碗は形がますます安定してゆき、ろくろの良さがあますところなく現出する。又紅志野にしても初めは紅色が口辺に二、三点あっただけで上釉も平坦にかかっているだけだが、三十年一生懸命使って育てみると、上釉は生地にくい込み、虫喰いが出来、更に玉の様になってあたかも雪の降った感の茶碗になった。紅色も程良い色調で茶碗全体に出ている。この不思議な変化は驚くばかりである。これが茶碗の生命力と云うのであろうか……。

茶碗も生れて、そして育ち一人前のものとなる。先生はこれを『生みの親と育ての親』と云って居られた。

拝見したところ近藤先生は陶芸家でありましたが私には一人の修行者とうつりました。佛の教えの道をひたすら歩き続けた修行者でした。最晩年になり申しておられましたが、『最近うれしいことがある。阿彌陀様に私全部をお願いし、その肩越しに筆を動かしていると実に楽に仕事が出来る』と。

先生が亡くなられてから初めて仕事場と、もう一つ隣室の先生が想を練られた小部屋を拝見し、深い感動を覚えました。そこは正に佛壇の中に入った想いでした。

嫁が憎いの、姑が憎いの

佐藤　俊明

徳川時代、盤珪永琢（一六二二――一六七三）という人がおった。不生禅を唱えた禅僧として有名であり、大法正眼国師と諡（おくりな）された高僧でもある。この人は仮名法語でわかりやすく禅の真髄を説いているが、その中にこんな教えがある。

嫁が憎いの、姑が憎いのと、よくいわっしゃるが、嫁は憎いものではないぞ、姑も憎いものではないぞ、嫁があの時ああいうた、この時こんなきついことをいわっしゃった。あの時あんな意地のわるいことをしなさったという、記憶が憎いのじゃ。記憶さえ捨ててしまえば、嫁は憎いものではないぞ、姑も憎うはないぞ……。

まことにおもしろく、またわかりやすい説明だが、では、知識や経験の記憶を捨て去った心のすがたはどうであろう。これまた盤珪永琢の言葉によると、

人間の本性というものは鏡のようなものじゃ、本来何もない。ものがくれば映るが、鏡の中に生じたものは何も無いぞ。ものが去れば消えるが、鏡の中に滅したものもない。鏡の中は生ぜず、滅せずじゃ。また、きたない犬の糞を映したからとて、鏡はよごれはせんぞ、きれいな花を映したからといって、それで鏡がきれいにはならんぞ。鏡の中はよごれず、きよからずである。重いものが映ったからといって、鏡の目方は増えやせん。軽いものが映ったとて鏡の目方は減りゃせん。鏡の中は増さず減らずである。『般若心経』に、不生不滅、不垢不浄、不増不減とあるのは人間の本性を謳ったものじゃ……。

実にわかりやすい説明である。

「続・二つの月」より

善光寺
横浜

●タイ留学僧現地レポート

タイ・サンガにおける雨安居について

田中智誠

立命館大学経営学部卒業。
宇治黄檗山禅堂に掛錫、後、
滋賀県正瑞寺に入寺。
昭和24年鳥取県生まれ。

今年度の雨安居は八月一日（太陰暦第八満月の翌日）より十月二十八日の満月日までであります。その期間をタイでは〝パンサー〟と呼んでいます。入制日にあたる八月一日をワン・オーク・パンサーと言います。

タイにおける二十代の青年男子にとってはこの三ヵ月間のパンサーをはさんでの出家修行がもっとも理想とされております。したがってカオ・パンサーが近くなりますとバンコク市内では、得度式へむかう長蛇の行列がよく見うけられます。ドラやタイコを使っての大変にぎやかなもので、台座に乗せられた得度予定者の姿を端から見ていますと出家修行は男子にとって、一世一代の盛儀と言いますか、〝男の花道〟なのかなという感じがするほどです。

こうして誕生したピク・ナワカ（パーリ語で新比丘の意、雨安居未経験者をさす。）によってパンサー中の比丘数はそれ以外の平均数の約二倍になるようです。一九八〇年十二月末のタイ文部省宗教局統計資料によりますと、同年度パンサー中比丘安居者数は三十五万

七千四十八名、パンサー外は十四万六千七百十三名です。また二〇歳未満の沙弥ではパンサー中が十五万二千百十名、パンサー外では八万四千五百四十八名です。因みにワット（寺院）数は三万百七十九ヶ寺です。（同年度総人口は四千六百九十六万千三百三十八人のうち仏教を信奉するものが九五・四二％の四千四百七十二万五千九百七十九人、回教徒が四・〇二％の百八十八万七千八百四十六人です。またタイ国には大乗仏教に属する中国系寺院が十八ヶ寺にベトナム系が十三ヶ寺あります。）

ワット・パクナムにおいては八月一日の午後、パーリエン（パーリ語国家試験）段位とパンサー経験年数ならびに得度順位にもとづいて本堂に整列して坐り、略式晩課ののちパンサー期間中三ヵ月止住の誓願文を唱えます。当寺院本年度雨安居結制比丘数は約四百名で、沙弥は八十四名です。この寺には沙弥のための仏教学院が併設されておりますが、学校が夏休みとなる四月に沙弥の一時的出家が多いようです。（パンサーはパーリ語のワッサワーサからきているようですが、こちらでよく〝ルンピー・ブアッキィーパンサー・レーオ？〟と聞かれます。これはパンサーをいくら過ごしたかという意味から転じて〝貴僧の日本での法臘は何年ですか？〟という意味です。日本の禅道場では慣例的に入制中の三ヵ月を結制把住期間として修行者の行脚・転錫を禁じております。それと同様にパンサー中は原則的に行脚・外泊が出来ません。パンサーが明けますと制限がとかれますので一時または暫時の間もう少し己事究明をとか山寺で瞑想修行をと思う人以外、所期の目的を果した一時僧たちはどんどん還俗していきます。）

パンサー修行の主人公たるピク・ナワカにとっての日課はまず朝四時にベルが鳴りますが、大勢の寝起きしている都合上三時半には起床となります。それから衣帯を整えて（こちらの正式出頭の着衣で）四時半本堂に着座、四時四十五分～五時四十五分（法話とスワット・モン＝お経の練習）、六時～六時二十五分（粥

座)、六時半〜七時(朝課)、八時〜十時(教理・教法の講義)、十一時〜十二時(斎座)、十四時〜十六時(講義)、十七時〜十八時(晩課)、十八時〜十九時半(瞑想)というのがあらましです。

一時的出家僧が大部分を占るピク・ナワカにとって集中的修行期間であるパンサーは、実践的修行をとうしての法の体得にあると言えます。それはまた彼らの還俗後の新生活においても重要な意味を持ってくるものと言えます。

個人や家庭生活から社会一般にいたるまで仏教やバラモン教的色彩の儀式に始って儀式に終わるのがタイ国の伝統の一つです。得度式より還俗にいたるまでの一連の手続きは一生涯に一区画を呈する最大通過儀礼と言えます。得度式が大々的にオープニング・セレモニーとして形式を飾るものであるならば、パンサー修行はメイン・イヴェントとして内容の充実を計るものと言えましょう。

還俗後の彼らは各々の生活に戻り、やがては国家社会を支える一員となる人たちです。還俗にあたっての彼らの所得たるや如何るものかは察しかねますが、両親をはじめとする親族、知人、友人らの(家庭やコミュニティーでの)期待がきわめて大きいようです。即ち出家生活を経験して初めて一人前の社会人として認められる彼らこそはタイ国の理想的臣民として明日のタイ・サンガを物心両面から支え、ひいては国家社会の繁栄発展と安泰に寄与する中心人物となるからではないでしょうか。現在のタイ国は政治経済の面で多くの難題をかかえていることは事実ですが、多くの若者が多大な時間と費用の犠牲のもとに一時期を僧伽へ身を投じて修行にいそしむということは形どおりの説明ではすまされないものがあると思います。東南アジアの発展と安定のためにはタイ国の果す役割が今後益々重要なものとなってきておりますが、二十一世紀の仏教の姿・将来像が如何様なものとなるか興味あるところであります。

こちらでの行持面についてですが、毎日唱えられて

いる朝晩課のなかで初めの方の部分に仏の崇高なる十徳を讃える箇所があります。この部分は他の経文の中にも多く出てきますが、こちらの朝課に含まれるものを漢訳したものが、中国総合仏教の伝統をひく黄檗山萬福寺の晩課念経のなかにも出てまいります。江戸時代にくらべると簡略化されていますが、現今においては陰暦の新・満月に相当する朔旦（初一日）と望旦（十五日）の両日に祝聖の儀が執りおこなわれます。その前日、即ち毎月十四日と晦日に行われる羯磨（けもう）晩課と称するものの中に含まれております。それは禮佛懺悔文（三十五・五十三佛名懺悔経）と言うもので、やはり初めの方の部分で三十五佛名が始まる前に仏の十徳に相当するものが出てきます。漢訳では――南無如来（一）應供（二）正遍知（三）明行足（四）善逝（五）世間解（六）無上士（七）調御丈夫（八）天人師（九）佛（十）世尊――であります。それがこちら（ビルマ、スリランカ、バングラデッシュ、ネパール等も同様）の朝課の――ナモー・タッサ・パカワトー・アラハトー・サムマーサムプッタッサ（三唱）――のあとに続く部分がこれに相当します。即ち――ヨーソー・タターカート（如来）・アラハム（應供＝阿羅漢）・サムマーサムプッタッサ（正遍知＝正自覚者）・ウイッヂャチャラナサムパンノー（明行足＝明行具足）・スカトー（善逝＝修伽陀）・ローカウィドゥ（世間解）・アヌッタローー（無上士）・プリサタムマサーラッティ（調御丈夫）・サッターデーワマヌッサーナム（天人師）・プットー（佛）・パカワー（世尊＝婆伽梵＝薄伽梵）――以上の部分であります。黄檗山では羯磨（けもう）がある日は禅堂雲水にとっては把針灸治となります。黄檗における法式や梵唄（ぼんばい）様式明朝時代のものを引継いでおります。経の中国本土はもとより台湾・香港・タイ・シンガポール等々の中国寺院でも同様の梵唄法式を見ることが出来ます。事実バンコク市内の〝ヤーワラー〟と呼ばれるチャイナ・タウンにある龍蓮禅寺で行われている晩課の蒙山施食儀の部分は、昨年来訪中時に福建省尼僧仏学院が併設されている崇福禅寺で見たものと

同一であります。八月頃のバンコク市内では、よく赤紙に普度とか、普度孤魂（施孤陰魂）勝會また孟蘭勝會などと書いた貼紙を目にすることが出きます。日取りは大体農暦（旧）の七月中が多いようです。バンコク市内で代表的中国寺院である龍蓮禅寺と普門報恩寺の施餓鬼を見ましたが、使用テキストは〝瑜伽焔口施食壇儀〟というもので日本、中国本土とも共通のものです。法要自体も全くと言ってよいほど同じでありました。純然たるお寺以外にも無数にある廟宇、たとえば関聖帝君廟、天后聖母廟、道教廟など、その他大勢の寺廟においても同様に施餓鬼行事が信者さんたちによって行われているようです。

こちらタイでは一ヶ月に約四回のワン・プラという仏日があります。（ワン・プラのプラはパーリ語のすぐれた、高貴なるという意味のワラからきています。タイでは仏様、仏像、僧名、国王、神様、太陽、お月様等聖なるものの名称に冠するプリーフィクス＝接頭辞の一つです。）ワン・プラは陰暦使用時代に月の満ちかけによって出来た節目となる日でした。それは新月満月と二回の半月の日であります。毎日東から登ってくる旭日を拝むことは感動的であると言えます。太陽あっての我々の存在であることを考えてみるならば、その恩恵たるや計りしれないものがあります。一方、三十回相当の太陽を拝む日数を要して一度満月となられるお月様の存在は、夜空にきらめく幾多の星の中でも神秘的かつ一番身近なものであります。潮の干満などの天地自然のリズムを司ったり、宇宙生命の分身である我々人類の生存に必要な制御を施したりするのは、無言の説法、大慈悲心の発露と言えるでしょう。〝おのが目の力で見ると思ふなよ月の光で月を見るなり〟と道歌にありますが、やはり夜陰にあっては最も崇高なるものとして畏敬すべき対象ではなかったかと思います。ワン・プラの日には、一般在家者は仏法僧の三宝に帰依することによって托鉢僧に供養したり、午前中ワットでの在家説戒に参加して仏戒を唱え、授かり、遵守するのがならわしです。ですから伝統的価値観で

あるタン・ブン行為を果す絶好のチャンスとなり、祭日や週末とワン・プラが重なったりしますと、ワットは参拝者で大変な人手となります。

新・満月の両日午後、ワットの布薩堂では布薩式（二二七条の具定戒＝パーティモックの誦出）が比丘全員参加のもとに行われます。かようにワン・プラの日は比丘のみならず仏法僧を依りどころとする在家信者にあっても戒律遵守の上できわめて重要な節目であると言えます。

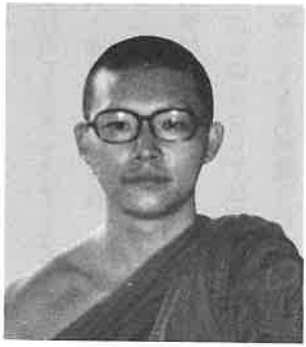
在家戒と言えば、パンチャ・シーラ（五戒）が基本となりますが、ワン・プラ当日に授かるのは〝ウポサタ・シーラ〟と言って八斎戒であります。この日は文字どおり精進日となりますので、（一）不殺生戒により蟻や蚊一匹の生命をも尊重し無益な殺生をしない、（二）不飲酒戒により放逸の原因になりがちなお酒を売らない・買わない・飲まないとなり、（三）非時食戒により午後の食事を断食するかたちとなります。他に（四）不妄語、（五）不邪淫、（六）不偷盗の各戒、それに（七）歌舞音曲、観劇、装飾、化粧を控える戒と（八）一ハッタ（約65㎝）以上高くて立派な寝床を使わない戒があります。

比丘にとっての持戒ですが、制度的には月二回の布薩式があり、接するたび感銘深いものがあります。比丘の生活が衆目監視のもとに行じられる国柄ですから大勢の人々によって励まされることも事実です。ブッダの教法宣布という点に関しては国全体として取りくまれており、仏国土出現のために永続的努力が払われていると言えます。

●タイ留学僧現地レポート

カオ・パンサー (Khao Phansah) 雨安居を了えて

梅田 尚平



佛教大学文学部佛教学科卒業
総本山知恩院に於て伝宗・伝戒道場成満。
昭和38年熊本県生まれ。

I

タイにおいては仏教を国教と呼んだとしても決して誤りではない。国教という意味ではバンコク市内に王立寺院が百六十一存在しており、タイ国憲法第二十六条では、国民の信仰の自由は認めているが、国王は仏教徒でなければならず、かつ仏教の擁護者としてあるべきことが述べてある。そして国家が国庫予算から仏教の保護発展の為、支出していることも明らかである。

実際、国民の九三・六%は仏教徒であり、タイの男子は二十歳になれば個人の事情により時期の相違はあるが、一時的に出家得度しおよそ三ヶ月間僧院において修行する慣習がある。いわゆる風習のようなものであって強制や法律的義務ではない。しかしこの入門修行の経験のない者は官庁に就職する時や昇給兵役義務の軽減などの考慮の際、不利なことがあることもいわれている。従ってこの国では仏教は法の規定する以上に国民生活に大きな影響を与えていると思える。

南方上座部仏教の国では僧は完全に出家し社会生活から隔絶された僧院において仏道修行に専心している。そしてその僧達の行いがその国の宗教意識の骨組みを形造っているといえる。学校教育では教科書によって知識的観念的効果がもたらされ、徴兵制または志願制兵役の国においても兵役教育は訓練によって規律や服従を教え実践的な面において学校教育を補う効果があるといえるが、僧修行は義務や強制によらない内在的な信仰実戦の陶治ともいうべき効果として国民に対し大きな意味を持つものと思われる。

入門修行の年令は普通は成年に達した二十歳からである。ワットパクナムの今年の新参比丘は百六十五名で平均年齢二十五、八歳、最高齢四十八歳、また未婚者が全体の八割を占め、三ヶ月間比丘として僧修行を了えたのちいわゆる成人として社会的にも一人前として認められた上で結婚するのが理想的な形となっているようであり、一種の通過儀礼としての機能を果たしている。入門の時期としては年中どの時季とは限られてはいないが、おおむね、タイ暦のカオパンサー、すなわちタイの陰暦八月の新月の第一日（陽暦七月頃）に入り、オクパンサー（Wanok Phansah）、陰暦十一月の満月の日（陽暦十月頃）に出ることになっている。今年のパンサーの入りは、八月一日、オクパンサーは十月二十八日であった。

おりしもこの三ヶ月間は、タイの降雨の季節でもあり、一日に一度は夕立が来る雨季であり、この間比丘は旅行をさけ禁足し、夜の外出は許されず終日僧院に留まることになる。

午前四時には起床し、五時からの指導僧による教典読誦の講習と朝課、朝食をはさんで休息ののち八時からパーリ語演習、仏典講義、仏教史、宗教儀礼等の勉学、十一時の昼食ののち二時から同じく教理学校へ赴き、休息をはさんで夕課、瞑想という過密スケジュールをこなしていかなければならない。

一九八二年の文部省宗教局の統計年鑑によれば、タイの全仏教徒中、黄衣をまとう比丘の総数は二七四〇

五八人で成年男子の約二・七%でうちサーマネーン（沙弥）二十歳未満の見習僧は一三三八〇三人で歴史的にみて修行経験者は六十歳、七十歳代は九七%であるが、三、四十歳代は三十%以下に下っていて、毎年若い人の入門修行者が減少してきている傾向にあるといわれている。

私が九月二十五日にワットパクナムで今期修行している新参比丘（ピクナワカ）（一六五名に対し九五名の解答者）に対して調査したアンケートの統計からみると、新参比丘の四三%までが仏教について勉強したいと答え、そして両親に対する恩返し（両親に功徳を積ませる）の為二三%ということが、入門修行の動機の上位となっている。その他に、自分自身の信仰を得る為、結婚の前に修行しておく、習慣だから、修行した後の状態（将来の展望）が良好となる為、黄衣にあこがれて、等でおもしろいと思ったのに性欲の克服というのが九・七%あり、私の友人のピクナワカなどは現在奥さんが妊娠中でその間の浮気封じの為に修行させられているのだなどと冗談をとばしていた。また何故ワットパクナム寺院を選んで得度を受けたのかという質問には、ワットパクナムは瞑想修行の寺として有名であること、そしてその実践の為の設備と教授陣の充実をあげ、還俗後の在家信者となってからの宗教儀礼もあわせて勉強できることが八一%を占め、それに加えて前住職チャオクン・プラ・モンユン・テープムニー師に対する尊敬の念が彼らをこの寺へ向わせたようである。職業別にみても内務省に勤務するものが二〇%銀行員や大学生、そして海軍や陸軍に所属するものが一般的に多く、三ヶ月間の有給休暇をフルに利用できる職種が有利であり、一般商店や販売業につくものは公的機関に努めるものより不利であり、あるナワカなどは、僧修行の為にホテルのベーカリーを解雇され、それにもめげずひたすら修行に励んでいた。

II

七月三十一日にアーサラハブーチャーといわれる初説法祭が行われた。この祭日は、入安居カオ・パンサーが始まる前日に行われる祭典で、釈迦が覚りをひら

いて六十日後、ベナレスのイシパタナ Isipatana の庭園で五人の修行者に初めて法を説いたことを祝うものでこの日ワットパクナムにおいても雨安居に入る修行僧達の為に日常生活用具（傘、石鹸、薬品、浴衣等）が多くの信者の方々から供養された。八月一日は入安居カオ・パンサー、この日パクナム寺院に所属している全比丘がそれぞれパンサー歴の順に布薩堂（uposatha）ウポーサタに集合し、全員出席が確認されたうえで今年の安居に入行することを仏陀に誓う式が行われた。私はこの式に参列していてアユタヤ様式の流れを汲むプラッタルーブ（仏陀像）の端整な顔立ちと視線をやや下にむけた眼差しから近づくことの出来る人間として非常に親しみを感じたことが印象に残っている。パンサーの期間はそれまでの個人にゆだねられていた修行形態から古参比丘からは新参比丘に対する指導が行われ、仏教の教義が伝えられ、僧院内における集団生活の体験と二二七の厳格な戒律遵守の実践にはもっとも最適な時期となっている。

午前四時に廊下に鳴りひびくベルの音で目がさめる。洗面と水浴ののち、黄衣を着用しまだ明けやらぬ空に吹く涼しい風に打たれながら布薩堂へ向かう気分はすがすがしいものである。チャオアオワット（住職）の戒律と僧としての生活上の訓示ののち、朝課（タムワットチャオ）thamwatchao があり、それから斎堂 Sala において朝食をとる。この寺院においては斎堂で食事の供養を受けることはすなわち托鉢と同じ意味にあたる。朝食ののち供養者の為にプラパリット Phraparit（護呪経）を唱え祈念を捧げる。

八時からは教理学校においてパーリ三蔵、戒律、仏教史、宗教儀礼の四科目にわたり、四人の教授陣によって講義が行われる。古参比丘達は同じくこの教理学校において、「ナクタム教理試験」の上級合格の為に、また同じく「パリエン」といわれるパーリ語試験の昇段合格の為それぞれサーマネーンも含めて真剣に勉強おもに暗記に励んでいる。十一時の昼食をはさんで二時から同じく教理学校で勉学の時を過ごす。入門修行

の動機に仏教を勉強したいという答えが多かったように総じて新参比丘の授業態度は熱心であり、予習復習もよくやっているようである。サーマネーンなどは皆が起き出す前から一人庫裡の廊下に出て何やらパーリ語を繰り返し暗誦している。なにしろオクパンサー近くに行われる最終試験に合格する為に真剣に努力している様子を見ていて頭が下がる思いであった。競争心旺盛なサーマネーン達はひたすら暗記することに一生懸命なようで、発表の日、廊下の隅で一人悔し涙に咽んでいたサーマネーンの姿がとても印象に残っている。

午後五時からの夕課（Thamwatjen）が始まる前は必ず新参比丘と古参比丘がその日の戒律違反について互いに聴聞しあう形式によって懺悔が行われる。通常六時三十分からワットパクナムでは瞑想堂において一般信者メーチー（八戒を守り僧院で奉仕活動をしている女性仏教信者）サーマネーン、比丘等、約二百名程が「念処経」（Satipatthana sutta）を基本とした前住職（Chaokhun Phra Mongkol Thepmuni）チャオクンプラモンコンテープムニー（一八八五―一九五九）の彼独特の実修法によりダンマカーヤ（Dhammakaya）と呼ばれる瞑想を行っている。この念処経には不浄観により世間に対する執着から離れることが説かれてある。私は同僚僧に誘われてある日マヒドーン大学医学部に隣接されるシリラート病院において比丘に公開される解剖を見学させてもらったことがある。この不浄観による瞑想法は地方寺院において多くみられたが、都市部のこのパクナム寺院ではあまり強調されていないように思われる。

このワットパクナムには、幾人かの瞑想の指導的立場のチャオクン（Chaokhun）やプラクルー（Phrakhru）がおられ、それぞれ個人の庫裡においても数人の弟子達や一般信者が集まり、個別に指導を受けている。副住職（ローン・チャオアオワット）で一等瞑想指導僧官の日系二世河北国雄師（Chaokhun Davana Kosol Thera）がこの僧院では前住職の法灯を継いでおられその名声は内外にもひろく届いている。三十年のパン

サー歴からはさすがに深い境涯を感じさせるものがあり瞑想の大家として多くの信者達から信奉を集めておられる。私もこのチャオクンから親しくご指導を仰ぎ、実修していたが、私の場合結果のことばかりが気にかかり、瞑想をするとどのような効果があらわれるものかなどと行う前からこのような軽薄な考えが頭の中を支配していたが、考えればよけいできなくなるものである。私はチャオクンから「疑いをもたず意の置きどころ（腹部の臍の上二本指のところ）に外でなく内に心の眼を集注させる」ことについて詳しくご教示をいただいたが、Samatha（止）と Vipassana（観）を含むこの瞑想法については注意力散漫な私には容易ならぬことで心で心をコントロールすることの難しさを感じざるを得なかった。タイにはおよそ四十通りの瞑想法があるといわれているがいずれも上座部仏教の基本的な、戒・定・息の三学が密接な関係を保っており、その中での瞑想は上座部仏教の（定）の中核となる修行法である。夕方になると一般在家信者達もそれぞれの仕事を了え思い思いに瞑想堂へ集まってきて共に静慮の時を過ごすがやはり私には世間の煩雑な社会から離れ、極力むだなエネルギーを消耗させないようにしている戒律に根ざした生活をしている僧の方が意識を集中し易い環境にあり瞑想には有利のように思われる。瞑想が終わるとそれぞれ庫裡にもどり就寝の時まで自由な時間となる。私はこの僧院においてタイの比丘をはじめ、スリランカ、バングラデッシュ、ネパール等数多くの外人僧と交流を持つことができた。特に三人のスリランカの比丘からは共に日本語を教えて欲しいということで親しくなり、ワットサケーからも通ってくるという熱心さである。スリランカの日本語熱は非常に高いようであるがタイではやはり英語が話せることがまず先決であるように思われる。スリランカの比丘からは、カーストによる所属ニカーヤ（派）の違いから彼らどうしの目に見えない軋轢を感じさせてもらったし、タイにおけるスリランカ仏教の勢力の盛り返しを計る為、近々スリランカ寺院を建立する計

画があるらしい。またスリランカブディストソサエティ主催の会議に出席させてもらった時に初めて足を洗ってもらったこと、プラパリット読誦の相違、食事作法等、いろいろな面でよい経験となり、スリランカ上座部仏教の一面をみせてもらった。反面タイの新参比丘達との会話からは一時的な僧修行という点からも日常真剣に仏教に関する会話はあまり出ず、もっぱら世俗的な会話に終始していた為、俗っぽい話の中から俄僧である現代青年のもつ一般的な考え方をうかがい知ることができた。

Ⅲ

パンサーも後半に入り、十月十二日十三日と二日間にわたり、ワットパクナムでは（カターバンテエーマハーチャート）が行われた。この行事は仏教と民族信仰が結びついたもので二日間に幾人もの比丘が二人向い合って高座に上がりパーリ語によるバイタラを独特の節まわしをつけて読誦しあう。信者達の捧げるろうそくの灯が印象的でこの日は数多くの在家信者も一様に白衣を着用し、寺に詣り戒を守り、寺に対する寄進行為によって功徳を生み出す（Tan Bunn）のである。すなわちこのタンブンによって功徳を得る(Dai Bunn ダイブン）ことでこれがタイにおける民衆の信仰実戦の基本的原理となっている。このマハーチャートの功徳が、彼らにとって現世において災難からのがれ幸福を勝ちとるという積極的な目的を持っている為、最終日の午後九時に始まるサーイシン（Shaisin）ブン転送の儀式のころには斎堂いっぱいに埋めつくした信者達の中に一種の興奮した空気がただよう。安置された仏陀像の牛に巻かれたサーイシンの糸玉を伸ばし斎堂にめぐらされる。そして鉄鉢に三回巻き余った糸を親指と人指指の間にはさんで合掌し「守護の呪文プラパリット Phraparit)」をパーリ語で読誦する。比丘の読誦する呪文のもつ神秘的な霊力によって人々の厄を除き、幸福をもたらすと信じられている。読誦が終わると上座の比丘がサイシーンを切る。これを合図に信者も比丘もそれぞれ霊験灼かなこの糸の争奪戦が始まる。

そのすさまじさは私など何が起こったのかわからずにしばし呆然としていたほどである。それからチャオアオワット（住職）によるナム・モン（聖水）をかけてもらうことになるが、このナムモンが始まった瞬間、私の近くにいたピクナワカ（新参比丘）が急にうなり声をうあげ四つばいになってあばれだした。その力は想像を絶するもので五人がかりでやっとおさえつけることができたが、あきらかに人知のおよばない何かの力が加わったとしか考えられない状態であった。彼れは背中一面に Sak という虎の入墨をしており、ナムモンの威力で彼についていた邪悪な何ものかが苦しみのあまり除れようとした為におこったものらしい。正気にもどった本人は一時放心状態であったが、しばらくして何ごともなかったようにケロッとしており、何も覚えていないといっていた。私は今までにこのような現象を目前にしたことがなかったので、この国における宗教儀礼の中でのサーイシン（聖糸）と聖水（ナムモン）の霊力の重要性をあらためて感じさせられたとともに、一般民衆のこのような呪術的な要求にも答えてきたことが、この国における仏教の広範囲な指示と存続とに結びついてきた大きな要因であると実感した。

十月二十七、二十八日両日にわたりナクタム教理試験とパリエンパーリ語試験が行われ、同時に今期入行者に対する最終試験が行われた。ピクナワカ僧受験者数一六一名中一五五名が合格した。この日、現国王プミポン・アデュンヤデート(ラーマ九世) King BhumiPol Adulyadej が一九五六年十一月に二週間僧修行をされたという王立寺院のボウォニウェート寺院から住職のソムデットプラニャーナサンワラ師 Somdet Phra Nyana Samvara がおみえになり、自らの手で終了証と認定証を一人一人に授与された。私はこの時はじめてソムデットにお目にかかったがその独特の容姿とそつのない身の処し方、その存在だけでまわりの空気までかえてしまうような魅力をもつ孤高の長老比丘としての印象が強く残った。最終試験も無事終わると比丘達も緊

張が解けたように、皆開放的になり心は還俗後のことや、また Pavivatthabbam（パリワッタ）といわれる森の瞑想寺（ワットカマタン）へ遊行に出かける準備に忙しい。

二十九日には安居明けの供養が行われた。いわゆる僧自恣の日でこれは日本ではお盆の行事に当たるものである。仏陀像を先頭に住職自ら托鉢に出られそのあとにパンサー歴の上位の僧から順に続いていく、人々は朝早くからおもいおもいの供養の品と花や線香、ローソクまた白飯を用意しサイバード（施し）をしてくれる。僧院いわゆる僧伽の一員として修行することができない女性達や老人、子供達が僧に供養することによってその神聖さを分けてもらい徳を積ませてもらえるという便法になっている。僧が自ら托鉢に赴き、俗人（カラワート）に徳を積んでもらうことは一つの布施行（法施）であり、僧はカラワートに頭はさげることなくタンブンさせてもらった俗人が合掌して礼拝する。この無言の中に行われる教化活動は、僧の存在の神聖さがあってこそ始めてなされることであり、布教を使命としその教義を押しつけようとする大乗仏教の教化伝導とはまた違った趣がある。

IV

長かった三ヶ月のパンサー修行も幕を閉じた。得度してより六ヶ月を迎え、今までを振り返ってみて自分自身にとって、僧院内での生活やそれにともなう戒律の実践また数多くの未知の体験が様々な形で私に多くのものを残してくれた。タイ社会においてすなち、僧伽の中においては私は常に雄弁であるように心掛けていた。その為に読み書きはさておいてもタイ語の会話練習には前半かなり時間をかけて少しでも僧院内の比丘とのコミュニケーションをはかるよう努力した。おかげで多くの友人を得ることができた。タイ人の中には多くの親日家もいるが、反面アメリカにおける信頼感や白人文化のもつ伝統や生活習慣に対する理解度もかなり大きなウエイトを占めており、同じモンゴロイド系人種の日本人に対する近親憎悪的な不信や誤解が

存在していることも確かである。しかし僧院内ではおおむね私に対して比丘達は親しみをもって接してくれた。ものごとの外面にこだわるタイ人の外観至上主義は日常の会話の中で頻繁に使われる、「スワイ」美しいや「ダイ」可能を表す、「ケン」上手である等のことばに表される。私が最初に覚えたタイ語もこの三つの言葉でこの短い言葉の中にかなり多くの意味をこめることができるので重宝していた。日本人のように内面を重視し、「沈黙は多弁にまさる」「以心伝心」ということが美徳とされる文化とは異質な部分が多く一般にタイ人は話し好きであり話し下手を嫌うようでよくしゃべる人間が知性や教養の面で優れていることにもなる。私は絶えず比丘に対し僧院内や庫裡においては覚えたてのタイ語を使い比丘達の会話の中へ入っていった。短期間でも同じ僧院で修行し、同じ庫裡に住み同じ釜のめしを食ったという親近感からか打ちとけやすく、私は彼らから多くのことを学ぶことができた。パンサー期間中に仏教がタイの人々の生活の中に深く浸透している実態とそれにともなう信仰の篤さを実際に見ることができ、私自身は釈尊教団の僧伽において悟りへの追体験を味わうことができた。一時僧制度という伝統はタイ社会において国民に大きな影響をおよぼしているとともに、この習慣はこれからも残っていくだろうし、戒律を正しく遵守していくタイ僧伽が「世の無上の福田」としての存在である限り永久に続いていくものと思われる。また私自身としてもタイ社会における仏教僧伽の興隆とその存在の意義を広く知らしめる為に今後も仏教徒としての自覚と誇りを持ってその使命を果していきたいと思う。

最後に上座部仏教の地タイで安居修行の機会を与えてくださった、善光寺海外留学僧派遣育英会の黒田武志理事長に対し深く感謝の意を表すと共に三宝の御加護により一層の発展と興隆あらんことをお祈り申し上げます。

合掌

佛暦二五二八年十月二十八日　出安居ワットパクナム

梅田　尚平　拝

「月刊住職」九月号より転載

横浜市曹洞宗善光寺「海外留学僧派遣育英会」の目的と実際

開創十五年檀家二千に発展した新寺が打つ海外開教への布石

ちょうど十年前の八月、本誌が〝現代を生かす寺＝この新寺建立に学ぶものは何か〟と紹介した、横浜市港南区日野町の曹洞宗善光寺が、最近またも新たな企てによって、大きく脚光を浴びている。無からスタートして、善光寺を建立――今では、檀家数二千百余の横浜一、二の規模に育て上げた黒田武志住職（四十七歳）が、〝世界に通用する仏教僧を育てたい〟と、一カ寺の企画としては前代未聞の『海外留学僧派遣育英会』を発足させたのだ。

一カ寺単独で留学僧派遣

仏教会、あるいは宗門・教団の事業なら、いざ知らず文字通り一カ寺、一僧侶個人が、単独で宗教留学生制度を設けたのは、文字通りの快挙！

〝宗祖を通して釈尊に還る〟を、宗教生活の帰趨とする、住職・黒田武志師の道心の強さ、激しさはいうまでもないが、善光寺が、

留学先のタイ国ワット・パクナム

短年月に、それだけ力をつけていたのか、と、改めて感心させられる。

善光寺の成長・発展の軌跡については、あとでまた辿るとして、昨五十九年一月にプリントされた「宗教法人善光寺海外留学僧派遣育英会」の設立趣意書から、一部抜すいして転記してみることにしよう。

『善光寺を開創して十五周年（昨年一月現在）を閲しました。ゼロからの出発ではありましたが、法輪転ずるところ、食輪自ら転ぜられております。これ正に仏天の御加護と大方の諸大徳諸賢の御協力御支援の賜物で感謝にたえないところであります。（略）

いまや人類は宇宙時代に入り、時間的にも空間的にも距離は著しく短縮され、世界はあたかも一国の観を呈しておりますが、反面、人類はかってない不安と絶望の危機に見舞れております。これは明らかに現代社会の悲劇であり、今日ほど仏陀釈尊の教法宣布を必要とするときはないのであります。

「世界に通用する僧侶を育てたい」と黒田武志住職

しかるに、わが国は世界最大の仏教国でありながら仏教界は遺憾ながら、世界の大勢に即応して教化の実を挙げる態勢に欠けております。ここに海外生活を通して広く世界に活眼を開く人材育成の重要性を痛感するものであります。

よって善光寺は開創十五周年を期して報恩行の一端として、海外に留学僧を派遣し、人材の育成をはかり、もって、仏教を振興し、世界の平和、人類の進運に寄与せんことをねがい、海外留学僧派遣育英会を設立したものであります』

補足すれば、超宗派（場合によっては僧籍がなくてもいい）で集めた志望者の中から、学業操行ともに優秀で道心堅固、これならと

留学僧第１陣の得度式。左から梅田尚平師、田中智誠師

折紙つきの人材をえらんで、留学させるが、そのための旅費、生活費は、すべて善光寺が面倒をみようという趣旨である。

すでに、第一期の派遣留学僧二人が決定、去る四月に、タイ国バンコックのワット・パクナムに入寺――五月一日には得度式、同三日には布薩式を、それぞれ終えている。

これは、戒律のきびしい上座部仏教の僧院生活を一年間（もしくはそれ以上）実地に体験し、わが国の仏教との相互理解を深めるためだが、ワット・パクナムは、黒田師自身が、かつて修行したことのあるゆかりの寺（昭和四十～四十一年）でもある。

釈迦殿落慶の模様（57年10月）

募集から留学僧決定までの経過は、昨五十九年秋、善光寺から本山僧堂と地方僧堂、並びに仏教あるいは宗教学部のある全国二十いくつかの大学に募集要項を送ることに始まり、論文その他慎重な審査のすえ、最終的に選ばれたのが、黄檗宗の田中智誠師（三十六歳。立命館大卒。宇治黄檗山禅堂に掛錫。のち、滋賀県正瑞寺に入寺）と、浄土宗の梅田尚平師（二十九歳。仏教大卒。総本山知恩院で伝宗・仏戒道場成満）の二人だったわけなのである。

そして、現在、引き続いて、第二期生を募集中（締め切りは六十一年一月十日）であり、三人（予定）が選ばれて、今度はアメリカのロサンゼルス禅センターに派遣される。

同センターは全米に十二、イギリスのロンドンにも支部を持ち、信者約二万人。米人出家僧と在家信徒共同体（サンガ）で、開創（十八年前）主管は、黒田師の実兄・前角博雄師（昭和六年生まれ）である。

黒田師も、タイのワット・パクナムでの修行ののち、自身、この禅センターにも駐在、北米曹洞宗開教師（昭和四十二～四十四年）として、参禅指導に当たっている。

ちなみに、善光寺海外留学僧派遣育英会の陣容は、理事長が黒田師で、常務理事が宝泉寺住職で、前総持寺副監院の佐藤俊明師。仏教界代表、学識経験者、善光寺檀徒代表で構成される理事が六人、監事二人。これら役員は無給であり、ほかに事務担当の幹事が二人。

名誉顧問には、永平寺、総持寺、両大本山の貫首が名を連ね、駒大総長など顧問十人、参与六人の顔ぶれも、僧俗各界の一人者を網羅して、バラエティ豊かである。

この父にしてこの子あり

黒田師は口ぐせのように、以前から、こういっている。

「五十人の道心堅固な若手の僧侶が、街（社会）に出て行けば、世の間は必ず変わります。その五十人が、いないのですよ」

それが今回の〝世界に通用する僧侶〟の育成――育英会のアイデアに結びついたわけなのだ。

いや、そういえば、黒田師は、昭和五十一年の六月ごろ、某仏教誌主催の「総持寺の海外布教を考える」座談会で、次のような提案をしている。

『外人の参拝も多く〝国際禅苑〟と呼ばれさえする総持寺が、名実ともにその俗称にふさわしい本山となるために、南方上座部仏教との交流をはかり、相互理解を深めるべきだ。

善光寺の活力は寺檀和合から

そのために、毎年、留学僧を送ってはどうか』

当時、本山の出版部長だった前出の佐藤俊明師（現育英会常務理事）も、双手をあげて賛成。提案はみのって、翌五十二年、三人の留学僧を本山から派遣することになったという。

同時に、総持寺に国際部が新設され、黒田師が推されて次長となった。

ところが、結果は龍頭蛇尾に終わり、事態に進展はなく、やがて立ち消えてしまう。

やりたければ、自分の寺、自分の力でやるほかない、と、黒田師は考えたのだろう。ただ、それには順序があった。善光寺の伽藍の整備が一段落してから、と、黒田師は腹づもりし、その通り実行したのである。

では、黒田師がどんな人物で、善光寺が、どんな経過を辿って今日の大をみたのか、十年前の本誌の紹介記事と、多少重複するかもしれないが、あえて略述してみる。

開創15年祭にはハナ肇氏の講話（58年5月）

黒田師は、僧侶としては、いわば、サラブレッド。毛並みは、申し分なく、いいのである。

生まれは、栃木県大田原市の光真寺で、父・白純住職（昭和五十四年八十一歳で遷化）の六男。昭和十三年元旦に出生届。

この白純師が大変な傑僧で、まず、殿様寺で檀家が少なく、その上、先住の時代に火災で伽藍のほとんどを焼失してしまった光真寺を、庶民信仰（延命子育地蔵尊・開運甲子大黒尊天）の霊場として再生――関東でも最大規模の寺に復興させた。

その後、いくつもの新寺を開山。総持寺顧問会会長、総持寺副監院、同復興局長、全日仏事務総長、曹洞宗審事院院長、同宗議会議員、国際仏教興隆会常任理事（以下略）などを歴任し、遷化と共に、総持寺貴首から、西堂位を追贈されている。

こうした父の遺徳を受け、黒田師の兄弟も七人中実に五人までが寺院住職、あとの二人が、会社重役と大学教授という歩どまりのよさである。

こんな環境に生まれ育った黒田師だ。自然に仏法者としての心構えは養われてくる。

また、知らぬ間に、人づくり、寺づくりのあり方、無一物中無尽蔵の生き方を学び、堅固な道心が培われたはずである。

伽藍は非常に大きいが、経済的には決して裕福ではなかったという光真寺寺庭。

「学校には入れてやるが、卒業したら、一切かまわん。勝手にやれというのが父の教育方針でしたから、とにかく学校には入れてもらいました」

その学校が駒沢大だ。ここの大学院修士課程を黒田師は終え（三十七年）そのまま、総持寺に上山・安居する。九月送行（下山）して、十月には、永平寺に安居するが、体調をくずして一カ月で送行。

それから、日本全国の仏舎利塔巡拝を主目

的とする托鉢行脚。三十八年には、新しく開設された特別僧堂第一期生として、総持寺に上山安居。ここの夏季接心会の折、黒田師は、のちに善光寺の開基に請する、成寿堂本舗ナリス化粧品（現在は、株式会社ナリス化粧品）社長・故村岡満義氏及び現同社常務の東郷敏氏ら社員一行と、文字通り運命的に出会い、その知遇を得ることになるのである。

この村岡氏の援助で、総持寺送行後、黒田師はインド仏蹟巡拝の旅に出、そこでまたも大切な人と出会う。現善光寺檀徒総代で、仲人にもなってもらった著名な建築家・伊藤喜三郎氏だ。

巡拝後は、前にも触れたが、タイに入り、ワット・パクナムで出家得度。上座部仏教僧侶として修行を積む。

帰国して、曹洞宗高階管長〝秘書〟を一年ほどつとめ、渡米して、ロサンゼルス禅センターに駐在開教。四十四年帰国早々、現在地での新寺建立を決意し、活動を開始するのだ。

『大聖釈尊のお説きになられた生きた正しい教えを高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献したいため』

と、その趣意書に謳っている。

無が有を生んだ新寺建立

善光寺の現在地は、日野公園墓地（十一万坪）の正門近く。ここに、昭和三十六年、林堅峰師（三重県福源寺住職。総持寺知客）が、黒田師の父・白純師の勧めもあって、小庵を建て、非公式に長光寺と号していた。

だが、寺号公称に至る以前に、林師は四十三年に遷化。四十四年二月、アメリカから帰ったばかりの黒田師が、そのことを知り、無限の将来性を秘めた立地条件のよさに、ますます注目――新寺建立を決意する。

そこで、すでに人手に渡っていた小庵を、直談判で、二百坪の地上権もろとも六百万円で譲り受ける。資金は、父・白純師を通じて、銀行から借りた四百五十万円その他である。

境内地は、いずれ必ず購入するとの地主との一札を加えて申請――異例の早さで、同四十四年十一月二十八日、宗教法人〝善光寺〟として、県知事の認証を得る。

ナリス化粧品社長・故村岡満義氏を開基に請し、父・白純師を開山としたのは、黒田師の謙虚さと、感謝・孝心の表れだろう。

特記すべきは、新寺建立の同じ年の十二月二日、前出の伊藤喜三郎氏夫妻と村岡氏夫妻の媒酌で、福井県常在院住職（当時、永平寺単頭）加藤照雄師の二女で、ナリス・村岡社長の秘書をしていた倫子さんと、黒田師が結婚したこと。

お二人の仲のよさ、寺庭での倫子さんの賢夫人ぶりは、つとに定評があるが、夫妻の間に、中三を頭に幼稚園児まで、男四人女二人と子沢山。うち、長男・武徳君（現中二）は一昨年、二男・泰志君（現小五）は、今年七月、それぞれ得度している。

長男武徳君の得度式（58年9月）。仏弟子の仲間入り

新寺の歴史がそのまま夫婦のそれと重なる。話を戻し、善光寺の伽藍整備の目ざましい足跡を、ごく表面的ながら辿ってみよう。

やはり、最初の成功は、開基家村岡氏と、ナリス化粧品社員有志から、一千万円の浄財喜捨を受けたことだろう。これによって、四十五年一月八日に地鎮祭――本殿と客殿三十五坪を、坪当たりの工費十万円で建て、百六十四坪の土地を坪単位十万円で購入しながらも、その支払いは、四十五～四十六年で完了している。

カゲで寺庭を支える倫子夫人とともに

あとは、どんどん檀家が増え、善光寺が信用をつけていったので、楽である。

四十七年七月、本堂と客殿七十五坪の増築に踏み切り（工費千八百万円）同十一月二十八日、晋山式並びに落慶式。

すでに、檀徒は四百六十世帯を数えたが、ここで改めて五カ年計画を立て、檀徒数一千世帯を目指して、現在にも続く諸行事に熱を入れる。

五十年――本誌が取材した頃、同寺の檀徒数は八百世帯を越えていた――そして、さらに五十五年、檀徒数は千六百世帯に伸び、ここで、黒田師は、釈迦殿建立の誓願を実現化する。

設計は伊藤喜三郎建築事務所、施工は水沢工務店で、五十六年着工、翌五十七年十月四日に落慶式。隣接土地二百坪の買収を含めて総工費三億七千万円。続いて旧館の増築に五千万円。五十八年五月の工事完了と共に、同月二十八日に、開創十五周年記念式典。

今、善光寺の伽藍は、釈迦殿と旧館（不動殿）とで、延べ三百六十坪程。このほかに、隣接の民家六戸を譲り受け、仏典、宗教書、美術、文学書など約一万五千冊の書庫にしているのだ。

何が善光寺を躍進させたか

善光寺躍進の秘密は、何だろう？

第一に考えられるのが、立地条件のよさだ。日野公園墓地には約三万基の墓碑があるが、うち四割ほどは菩提寺を持たない。その一方、日野町にある六カ寺の住職は、黒田師以外兼職で、ウイークデーは寺にはいないのである。

加えて、黒田師は、葬儀を頼まれても、「お金はいいのです。誠心誠意やらしていただきます」を、モットーにしていた。自然、日野墓地周辺に十軒ほどある石材店や葬儀者の評判は抜群で、有形無形さまざまな協力が得られた。地域の人びとの受けも、すこぶるいい。口コミで噂はひろがり、加速度的に檀家が増えていったわけである。

葬式・法事を〝誠心誠意〟やるには、以前も今も同じことで、黒田師は、まず、その意味を説くことから始めるのだ。

お通夜には、生死について説き、葬儀に当たっては、曹洞宗の正規の法式に従って、〝剃髪〟で、煩悩をとり、導師が死者にかわって懺悔、三法に帰依、戒を守る〝授戒〟の意義を述べ、肉親の死に揺れ動く遺族の気持ちを

〝安心〟に導く――。

「安心を与えられねば、なんのための葬式かわかりません。仏法の原点にかえらねば」

と、黒田師はいうのである。

もちろん、葬式・法事だけで明け暮れたわけではない。周囲に、いくつもの巨大団地をひかえた土地柄。そのほとんどをしめる若い世帯の〝潜在的需要〟を喚起し、それまで縁のなかったお寺に魅き寄せるには、多彩な行事を絶え間なく、くりかえし、続けなければダメだ、と、黒田師は考えるのだ。

そこで、最初にやったのが、鶴見女子大保育科の学生三、四人に手伝ってもらい付近の子どもたちに呼びかけてひらいた日曜学校。

檀家が増え、場所も暇もなくなったので、三年ほどで、これはやめたが、善光寺の定例行事は、年間を通じて、びっしりつまっている。ざっと列記してみるが、こんな具合だ。

一月――新年祈禱会　二月――節分会、開山忌。定例総代会　三月――春彼岸法会　四月――花まつり法会。婦人会総会，五月――婦人会研修会。不動明王大祭　七月――大施餓鬼会。棚経（お盆供養）。本寺光真寺参拝。参拝旅行　九月――医事・身上相談。秋彼岸法会　十月――お茶会　十一月――七五三祈禱会　十二月――成道会。

これら、どの行事でも黒田師は必ず法話をすることにしているし、福引きやバザー、あるいは芸能人を呼んでの催しもする。

寺に親しみを持ってもらい、寺と檀信徒、および檀信徒相互の心のふれ合いを深めてもらうための手段（てだて）である。

ほかに、写経会＝毎月第一土曜日　参禅会＝同第二土曜日　仏典研究会＝同第三土曜日茶道教室＝同第一・第三月曜日　書道教室＝同第二・第四土曜日（参禅会とは時間が違う）少林寺拳法＝第一・第三水曜日。

まさに、フル・回転である。関係団体も、次のように多彩であり、行事をお寺とタイアップしたり、独自で行ったりしている。

成寿山善光寺護持会、同不動明王奉讃会、同参禅会、同写経会、同甲子大黒天講、同青年会、同婦人会、同福祉相談所、同子供会、同茶道会、同仏具会。

「書道、お茶など、どの教室もそうですが、学ぶのも檀徒なら、指導者も檀徒なのです。もう、これだけ檀家がありますと、あらゆる分野の専門家が揃うわけですよ。さまざまな職業での第一人者が、私のブレーンでいてくださるからこそ、善光寺はここまでこれたのだと思います。人との出会いの大切さを痛感いたしますね。そして、人づくりこそ寺づくりなのだ、と」（黒田師）

行事のうち、特記すべきは、毎年九月、敬老の日に行われている無料健康診断だろう。

同寺総代で、防衛医大教授の中村治雄氏が担当で、檀徒を対象に、もう十年以上も続けられてきた。そのカルテは、すべて、お寺に保存されてある。

善光寺を、〝ひらかれた寺〟あるいは、〝活き活きとした対話の場〟として盛り立てているもう一つの力は、事務局を構成する檀徒たちである。初め十人によってつくられた事務局も、今は六十人近くにふくれ上がり、その職業も、会社経営者、医師、司会者、デザイナー、タクシー運転手と、なんでも間に合う。

大きな行事の折、典座寮（台所）をとりしきるのも、檀徒の主婦たちだ。

善光寺の釈迦殿、不動殿には本尊釈迦牟尼仏、身代わり不動明王を初め、円空仏、中国元朝期の聖観世音菩薩などに、南方からの渡来仏を含め、美術的、文化財的にもすぐれた

価値を持つ〝仏さま〟が、多数安置されている。黒田師が、それぞれの〝縁〟で、時間的にもばらばらに勧請したものだが、

「これら仏さまのご加護があればこそ、善光寺は発展してこれたのだと信じております」

黒田師は、合掌して、祈るようにいうのだ。

美術的、文化財的価値といえば、善光寺には、故浜田庄司氏の作品など、すばらしい陶磁器が、沢山飾られてある。

これらも、檀家との濃密な交流から、善光寺に持ちこまれたものなのである。

常に未来を見つめて

人づくりこそ、すべての基礎――と信ずる黒田師の情熱の一端が、このたび、留学僧派遣育英会という具体的な形を得た。

第一期生として、すでに、タイの僧院に入寺・修行中の田中智誠師と、梅田尚平師は、留学生を応募したときの論文で、こんな覚悟を述べている。ほんの一部分だけだが、乱暴に抜すいして紹介しておこう。

『やれ制度仏教だ、儀式仏教だと呼ばれる日本とは好対照をなす南方仏教徒の姿に触発されて自己の本分を見つめ直すことは、私にとっては文字通り再出家の覚悟と言える。(略)人間一人で出来ることは時間的空間的に限られるので、互いに知慧を出しあって人類救済の大目標に向かって大誓願をたてようではないか。微力ながら先駆者の足跡を継承して菩薩願行に出むかんとする一人である』(田中智誠師)

『私は、法然上人の三学非器に至るまでの思想的変遷を、この機会に実践してみて、なぜ聖道門を捨てて、浄土門に帰入せられたのか、一度外側からみて内省する必要があるのではないかと考えたのである。

私がタイに留学して学びたいことは、所謂三蔵と三学による自己の苦よりの解脱、無明の滅却をめざすものであり、中道と八正道の実践により実存の構造を正しく認識することにある』(梅田尚平師)

この二人の英才が、何を得て帰国するか楽しみだが、戻ってからの義務は一切ない。何をしようと、勝手なのである。

黒田師はいうのだ。

「十年で、三十人、留学僧を送り出しまして、私は、そのうちの五人が、文字通り世界に通用する僧として役立ってくれればいいと思っております。量より質です。それから、ゆくゆくは、外国からも留学僧をこちらに迎えたいと考えております。そこで、別院を建てる心づもりで、ここから歩いて十分ほどのところに、三百坪ほど土地を入手しました。欲しいと思っていたところに、ちょうど(といっていいかどうかしれませんが)不動産屋の檀家が倒産しましてね。一億円の物件を半値でどうかと、逆に頼まれたのです」

とにかく、借金だらけだが、いくら金がなくても、やらねばならないことはやります、と、黒田師は、意気軒昂!

「檀家の方たちには、去年からお願いしているのです。ご飯を一日に半杯だけ減らして、善光寺に布施してください。それで、僧を養います、と。極端ないい方をすれば、私に本当の仕事をさせてくだされば、葬式なんか、タダでもいいのです、と」

お願いもするが、善光寺は檀家を大切にする。檀家とのコミニュケーションを強めようと、善光寺では、一昨年から、A5版六十四頁～八十頁の寺報『成寿』(季刊・不定期)を出している。これも、なかなか評判がいい。

(野火　晃)

●善光寺だより

釈迦殿脇侍の開眼式

昭和五七年一〇月落慶して以来、釈迦殿には本尊釈迦牟尼仏の尊像一躰だけでしたが、このほど念願の脇侍の制作が完了し、去る十一月二十八日、お不動様の例祭に因み、大本山総持寺祖院監院・乾坤院住職鷲見透玄老師を大導師に拝請して点眼法要をおこないました。法要の次第は次のとおりです。

一、法話　龍光寺住職　佐藤俊明老師

右終って引続き

一、大導師上殿　一、拈香法話（後掲）

一、上香、点眼　一、献茶湯

一、普同三拝　一、読経（普門品偈）

一、回向　一、普同三拝

一、大導師挨拶

引続き

一、祝辞　開基家　村岡　有尚殿

総代　伊藤喜三郎殿

一、感謝状贈呈

一、山主挨拶

法語

文殊大士

通身是智
假生金毛
莫認蹤跡
誰知厥高

普賢菩薩

色身妙現
象背如蓮
行願無尽
明月嬋娟

三尊瞻仰

智行在左右
両足大雄尊
三箇無為徳
元来絶語言

長仰万善慈光尊
成寿山色大悲生

通身これ智
金毛（獅子）に假（駕）生す
蹤跡を認むること莫れ
誰か知る厥高きを

色身、妙に現じ
象背、蓮の如し
行願、無尽
明月嬋娟たり

三尊を瞻仰したてまつる

智、行、左右に在り
両足大雄尊
三箇、無為の徳
元来、語言を絶す

長く仰ぐ万善慈光尊
成寿山色、大悲を生ず

感謝状

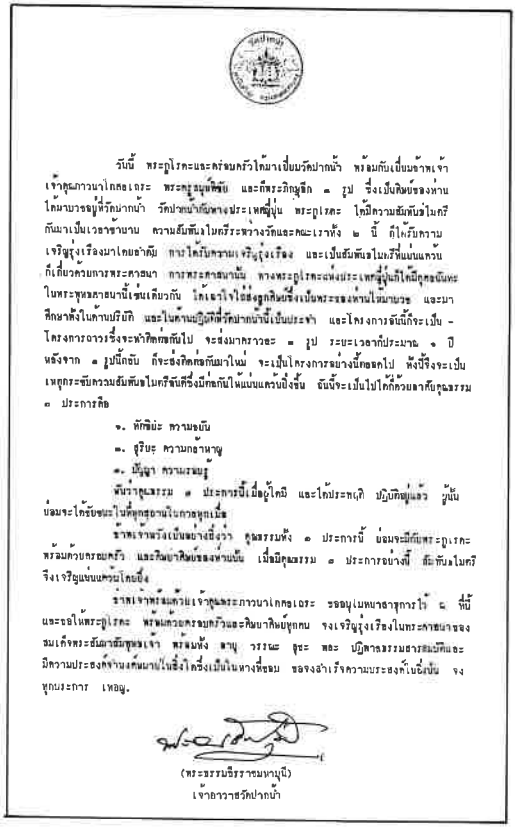
翠雲堂　山口之徳　殿

貴社は当山釈迦殿脇侍文殊普賢両菩薩の勧請にあたり当代屈指の大仏師西村房蔵氏が入魂の力作を納入されました。これ実にさきに納入された本尊と共に善光寺釈迦三尊として歴史に遺る不朽の名作であり感謝にたえません。
茲に開眼の儀則を厳修するにあたり記念品を贈り深甚の謝意を表します。

西村房蔵　殿

貴殿は当山釈迦殿脇侍勧請にあたり格別の力量に精魂を傾け見事に文殊普賢両菩薩を制作されました。これはさきの彫像本尊と共に善光寺釈迦三尊として長く歴史を飾るものであり歓喜愉悦感謝にたえません
茲に開眼の儀則を厳修するにあたり記念品を贈り深甚の謝意を表します。

タイ■ワット・パクナム住職よりの便り



รับนี้ พระภูไรคะและคณะมครัวได้มาเยี่ยมวัดปากน้ำ พร้อมกับเยี่ยมข้าพเจ้า เจ้าคุณภาวนาโกสะเถระ พระครูสมุทรพิชัย และภิพระภิกษุอีก ๑ รูป ซึ่งเป็นศิษย์ของท่าน ได้มาบวชอยู่ที่วัดปากน้ำ วัดปากน้ำกับทางประเทศญี่ปุ่น พระภูไรคะ ได้มีความสัมพันธ์ร่วมกันมาเป็นเวลาช้านาน ความสัมพันธ์ไมตรีระหว่างวัดและคณะเรา ๒ นี้ ก็ได้รับความเจริญรุ่งเรืองมาโดยลำดับ ทางได้รับความเจริญรุ่งเรือง และเป็นสัมพันธ์ไมตรีที่แน่นแฟ้นก็เดี่ยวควบคู่ทางพระศาสนา การพระศาสนานั้น ทางพระภูไรคะแห่งประเทศญี่ปุ่นก็ได้มีคุณธรรมในพระพุทธศาสนานี้เช่นเดียวกัน ได้เอาใจใส่ต่อศูนย์ศิษย์ซึ่งเป็นพระของท่านได้มาบวช และมาศึกษาตั้งไม้ท่านปริยัติ และไม้ท่านปฏิบัติที่วัดปากน้ำนี้เป็นประจำ และโดยงานการอันนี้ก็จะเป็น - โดยงานการอาวรซึ่งจะทำติดต่อกันไป จะส่งมาคราวละ ๑ รูป ระยะเวลาก็ประมาณ ๑ ปี หลังจาก ๑ รูปนี้กลับ ก็จะส่งติดต่อกันมาใหม่ จะเป็นโดยงานการอย่างนี้ตลอดไป ทั้งปีจึงจะเป็นเหตุกระชับความสัมพันธ์ไมตรีซึ่งมีกันกันได้แน่นแฟ้นขึ้นขึ้น อันนี้จะเป็นไปได้ด้วยอาศัยคุณธรรม ๑ ประการคือ

๑. ทัศนิยะ ความงดงาม

๒. สูรียะ ความกล้าหาญ

๓. ปัญญา ความรอบรู้

พึงทราบคุณธรรม ๑ ประการนี้เมื่อผู้ใดมี และได้ประพฤติ ปฏิบัติอยู่แล้ว ผู้นั้นย่อมจะได้รับชนะในศัตรูอานาจในการทุกเมื่อ

ข้าพเจ้าหวังเป็นอย่างยิ่งว่า คุณธรรมทั้ง ๑ ประการนี้ ย่อมจะมีกับพระภูไรคะพร้อมด้วยคณะมครัว และศิษย์ศิษย์ของท่านนั้น เมื่อมีคุณธรรม ๑ ประการอย่างนี้ สัมพันธ์ไมตรีจึงเจริญแน่นแฟ้นโดยยิ่ง

ข้าพเจ้าพร้อมด้วยเจ้าคุณพระภาวนาโกสะเถระ ขอขอบคุณเมตตาอาศรมการไว้ ๑ ที่นี้ และขอให้พระภูไรคะ พร้อมด้วยคณะมครัวและศิษย์ศิษย์ทุกคน จงเจริญรุ่งเรืองในพระศาสนาของสมเด็จพระสัมมาสัมพุทธเจ้า พร้อมทั้ง อายุ วรรณะ สุขะ พละ ปฏิภาณธรรมอาสวะสมบัติและมีความประสงค์ท่านมาปไปสิ่งใดสิ่งเป็นในหาง่ายที่ตอบ ของจงสำเร็จความประสงค์เบื้องต้น จงทุกประการ เทอญ.

(พระธรรมปิฐราชมหาบุญ)
เจ้าอาวาสวัดปากน้ำ

この度は、黒田武志老師と御奥様が、ワット・パクナムを訪問下され、まことにありがとうございました。チャオクン・パーワナ、プラクルーサムピッチャイ、そして二人の日本人比丘（梅田、田中氏）にお会いいただきまして、心からお礼申し上げます。ワット・パクナムと黒田老師の寺「善光寺」とは長い間仏教を通しての交流を続けさせていただき、今日の繁栄を築いてきている事は感謝にたえません。

老師は弟子達をタイに派遣すると共に自らもタイの仏教と瞑想について勉強されておられますが、老師の留学僧派遣育英会の計画は毎年二名の留学僧をワットパクナムへ派遣するということであり、この計画は日本の仏教とタイの仏教の交流を深めて行く上でも今後長く続いてゆかなければならないと存じます。そしてその為には次の三つの精神が重要であると思います。

① 勤勉（まじめ）
（誘惑に負けない強い力）　戒

② 精進（勇気）
（勇気を持って進んでいく力）　定

③ 智慧（真理）
（ものごとの真理を見抜く力）　慧

この三つの精神（チャオクンパクナムはこの精神を道徳ともいわれましたが精神の方がここでは適当と思われました。）を心に持つならばどのような仕事を行おうとも成功するであろうし、黒田師はこれらを持っておられたが故に今日の繁栄を築いてこられたのだと確信いたします。

私とチャオクンパクナムは、黒田師とその家族そして弟子達に三宝の力と波羅密の力によって法身成就と福楽長寿が得られんことを心から祈ります。

ワットパクナム住職
プラ・タンマ・
ティーララート・マハームニー

上座部仏教の安居修行

タイ国ワットパクナムで

現地報告

臨済宗妙心寺派光寺専門僧堂
僧侶道育英会第一回生
梅田尚平

タイ国の上座部仏教における雨林生活を体験中の青年僧から日ワットパクナムでの安居修行についてのレポートが寄せられた。この青年僧は、大阪市関区上本町の浄土宗大念寺徒弟、横浜市港区月町の臨済宗妙心寺派光寺住職梅田尚平氏が創設した「臨済宗雨林外国学僧育英会」の第一回留学僧である。今年の雨安居は八月一日から十八日まで、その期間多タイでは「パンサー」と呼んでいる。二十代の青年男子にとって、この期間をはさんでの三ヶ月間のパンサー修行は、一生のうちで最も大切な通過儀礼となっている。僧侶の日常は、一般の人とは別が厳しく、出家主義をたてまえとしながら、その実は放埒上の問題に異大？　な日本の仏教と異なり、タイでは上座部の厳しい戒律を守りながら、一方で在家者の修行については出入り自由の寛容さをもっている。日本の青年僧の目にタイ・サンガはどう映ったか―。

梅田尚平（うめだ・しょうへい）氏　昭和三十一年熊本県に生まれる。五十七年仏教大学文学部仏教学科卒業。大阪・浄土宗大念寺住職。大阪社会伝宗・伝道研究所所員。

三ヵ月僧院で修行する慣習

一時的に出家得度し、おおよそ成年に達した二十歳からである。ワットパクナムの今年のパンサーは、いわゆる仏教のような厳格な戒律の制約や法律的義務ではない。

タイでは仏教を国教と呼んだ。しかし、この入門修行の慣習は、国教という意味ではパンコク市内に五百寺院が百六十一存在しており、タイ国憲法第一百七条では、国民の信仰の自由は認めているが、国王ってこの国では、仏教は法の第一条に「国教の信仰」などの表現の問題、不利なこと、理想的な形になっているようにもわれている。従って、一種の通過儀礼としての入門修行の年齢は、普通は十八歳、二十五歳、最高は四十歳、また、未婚者は全体の八割を占める。三ヵ月間出家し、国家の為の人材として、僧侶を育てるとともに、社会的に一人前として結婚するのが慣習となっている。

一九八一年の文部省宗教局の統計調査によれば、タイの仏教会は総教団中、黄衣をまとった僧侶の総数は一千七百四十五万八千五十七人で、青年男子の約二十七人に一人の割合である。

過半は真摯な入門動機

一日に一度は夕立が来る。しかし、夕刻、暗くなっていると、雨足は、夜の外出も許されない。

タイの雨期の季節でもあり、雨足は、夜の外出も許されないのだ。

新参比丘にアンケート

一九八一年の文部省宗教局の統計調査によれば、タイの仏教会は総教団中、黄衣をまとった僧侶の総数は一千七百四十五万八千五十七人で、青年男子の約二十七人に一人の割合である。

うちサーマネーン（沙弥・二十歳未満の見習僧）は十三万三千八百三人で、歴史的にみて、修行経験者は六十歳、七十歳代は九七割方であるから新参比丘に対する指導が下に下がっていて、低年者の入門が減少してきている。

私が九月一千五百にワットパクナムで、新参比丘（ブクナワン）百六十五人に対して、年間四時、臨下に偏り機行なわれ、仏教の教義が伝えられ、僧院における集団生活と、百二十七の厳格な戒律遵守の実践は最適な機会となっている。

年間四時、臨下に偏り機行なわれ、仏教の教義が伝えられ、僧院における集団生活と、百二十七の厳格な戒律遵守の実践は最適な機会となっている。

教理学校でも四科目を履修

パンサーの期間は古参比丘から新参比丘に対する指導が行なわれ、仏教の教義が伝えられ、僧院における集団生活と、百二十七の厳格な戒律遵守の実践は最適な機会となっている。

一二七の戒律を実践

早起きし真剣な暗誦

タイを訪ねた黒田理事長を囲んで梅田（左）、田中両氏

御寄付御礼

海外留学僧派遣育英会募金に、右の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。

弐拾万円	京都	円浄寺様
壱百万円	京都	円覚寺様
五万円	東京	すみれ堂様
壱万円	横浜	小林富五郎様
五万円		渡辺令一様
拾万円		金田親男様
拾万円		松田亮三様
弐拾万円		神崎紫峰様

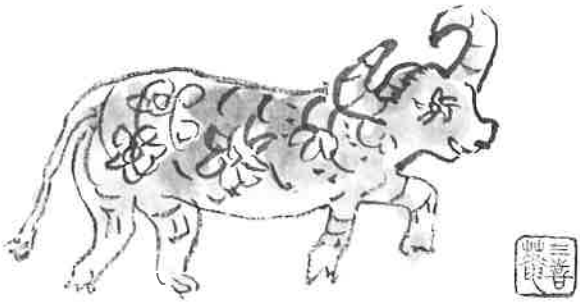
ご参加ください！

〝善光寺だより〟を今後、檀信徒の皆さま方の情報交換の場としても大いに活用していただきたく、皆さまからの投稿をお待ちしております。

心に残った出来事や随想を、思いのままにお寄せください。

巻末のハガキをお使いいただければ幸いです。

善光寺　出版部



昭和六十一年度年回早見表

一周忌	昭和六十年亡
三回忌	昭和五十九年亡
七回忌	昭和五十五年亡
十三回忌	昭和四十九年亡
十七回忌	昭和四十五年亡
二十三回忌	昭和三十九年亡
二十七回忌	昭和三十五年亡
三十三回忌	昭和二十九年亡
三十七回忌	昭和二十五年亡
四十三回忌	昭和十九年亡
四十七回忌	昭和十五年亡
五十回忌	昭和十二年亡

御先祖の年回供養はお忘れなく致しましょう。

昭和六十一年度成寿山善光寺　行事表

◈行事	◈日時
新年祈禱会	1月11日(土)午前11時
節分会	2月3日(月)午前11時
開山忌(定例総代会)	2月8日(土)午後1時
青年会総会	2月22日(土)午後2時
春彼岸法会	3月19日(水)午前11時・午後2時
花まつり法会(婦人会総会)	4月8日(火)午前11時
婦人会研修会	5月10(土)
不動明王大祭　大般若法会	5月28日(水)午前11時
大施餓鬼法会	7月9日(水)午前11時・午後2時
棚経(お盆供養)	7月10日(木)午前11時・(初盆) 7月13日(日)～16日(水)
光真寺参拝	7月23日(水)～24日(木)
医事・身上相談	9月15日(月)午前11時～1時
秋彼岸法会	9月20日(土)午前11時・午後2時
七五三祈禱会	11月15日(土)午前2時
お茶会	11月22日(土)午後1時～4時
成道会	12月8日(月)午前11時
写経会	毎月第1土曜日午後2時
参禅会	毎月第2日曜日午前6時
茶道教室(裏千家)	毎月第1・第3月曜日午後1時
書道教室	毎月第2・第4土曜日午後2時
成寿発行	年2回発行不定期

▼釈迦殿の落慶式のおこなわれたのが五七年一〇月四日、爾来まる三年、本尊釈迦牟尼仏は須弥壇上にただ独りでおられました。さびしかったことでしょう。人間でいえば単身赴任ですから。脇仏がようやく開眼のはこびとなり、本尊様もさぞおよろこびのことでしょう。人間でいえば本尊様は御主人、脇仏は奥様です。奥様の内助の功によって御主人の力は倍増するのです。釈迦殿の本尊様いよいよ御威光を発揮することでしょう。

▼文殊・普賢両菩薩は『不動経』の主役で、不動明王を紹介し、その徳を讃え、御利益について述べておられます。この両菩薩を釈迦殿の脇仏に迎えられたことは、釈迦殿と不動殿が目に見えない建物で堅く結ばれたことになり、善光寺の今後一層の発展が約束されたようなもので、めでたい限りです。(佐藤老師の法話より)

▼「宗教新聞」から、新年の抱負につき原稿を求められた山主は、「海の彼方に夢を」と題して、次の一文を送られました。

『一昨年、海外留学僧派遣育英会を設立し、昨年二名の留学僧をタイ国ワット・パクナムに送り、今年はアメリカの禅センターに派遣すべく目下募集中です。世界的視野のもとに—というのは私が学生時代からの念願で、タイ、アメリカで修行したのもそのためであり、その体験を通して有為の人材に海外留学の機会を与える事になりました。

そう決意し、伽藍整備が一段落したので直ちに着手した次第です。去る十月バンコクに行き二人の留学僧の修行の姿をまのあたりにみて、この大業に手がけた法幸を感じました。今年はアメリカ派遣、去年とはまた違った緊張が湧きます。有為な人材を送り、秋に現地で彼らに相まみえるであろうことを思い、今から海の彼方に夢を馳せてます。』

▼二月三日午前十一時より定例の節分会がございます。福升の用意もありますので、お揃いでお出掛け下さい。

(小熊)

成寿　第四号
昭和六十一年一月十日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

流水かんのん

失意にあえぎ
すべての光を失い
生きる力をすりへらして
さまよいつづけた果て
はるかにあなたを見て
胸をうたれたのです
私と同じ憂いの眼
私と同じ悲しげな笑み
ひきよせられて仰ぎ見る
〝ただじっと耐えよう
いまは……
すべては流れ去るものを〟
耳もとでささやいたあなた
ああ、あなたこそ
大悲観音　わが胸底に坐し給う

遠藤太禅「観世音声を限りに」より

春光滿
横浜